ファンタジーなんてクソ喰らえ！

月冴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファンタジーなんてクソ喰らえ！

【Ｎコード】
Ｎ７１３２Ｉ

【作者名】
月冴

【あらすじ】
【連載停止中・しばらくお待ちを】
四月、北条　秋人は私立御南茂（みなも）学園に入学した。
しかし、その学園には平気で暴力を行使する巫女さんや
タバコをバクバク食べる奇怪少年、おまけには太刀を腰にぶら下げる少女に気に入られてしまい、刀を常に持つことを強要してきた！
そんな秋人の波乱に満ちた学園生活は何の前触れもなく始まる。

―――――――――――――――――――――――――――――――

こんなタイトルでごめんなさい！

決してファンタジーを侮辱しているわけではありません。

01　入学したらそこは何でもありでした。

四月、全国的に入学シーズンを迎える時季だ。
それは俺も例外ではなく、
自宅から一番近い高校へと進学した。
私立御南茂学園。
在籍生徒１０００人と１人、ここいらじゃ一番デカイ学校だ。

「あ～　入学式無駄に長かったなー」
「そんな事言うなよ、アンタは真面目って人間に必要不可欠な要素が欠落しちゃってるんだから、そう感じても仕方ないでしょ」
「何、それ！　今何気に人間否定したよね！俺という人間を否定したよね！」
「今さら何言ってんの、私達の付き合いは長いでしょ？」
「長くても言葉の暴力は続けちゃダメでしょ！」
「ったく、秋人は見かけマジ不良なのに、心はガラスのハートだよな～」

こんなやり取りをしている相手は、岩裂　烈
俺の幼馴染、容姿は世間一般的に言うと「美少女」、でも中身は「ドS」という複雑怪奇な構造で、中学時代のあだ名は「真正の女王様」だった。

ちなみに、俺に真面目という要素が欠落しているという烈の言葉は半分的を射抜いているが、完全なる不真面目とい事ではない事実を強調しておきたい。

そして入学式を終えた俺らは教室へ向かう。
俺らが振り分けられたクラスは一年Ｆ組、ってか一年何百人入学し

たんだよ。

俺の席は窓側の一番後ろという好ポディション、なのに、
なのに何で隣が女王様ー！

「よう、秋人」

と満面のドS笑みでVサイン。
なに、その勝ち誇った顔。なにかいい事でもありましたか～？

「よ、よう」

そしてようやく担任の登場、
教室のドアがガラガラと音を立て開くと、
タバコに火を付けた中年の顎髭が入って来た。
教師が喫煙、何この学校！　本当に進学校かよ！
っていうか教師が生徒の前で喫煙ってダメだろォォ！

「は～い。担任の荻久保（おぎくぼ）で～す。とりあえず…」

そう言ってダル～イ口調の荻久保はチョークを手に持ち、黒板に字を書き始める。

自、

習、

……自習ゥゥゥ！？　自己紹介とかじゃないのォォ！
おかしいでしょ！

「先生！」

と烈が怒を込めた声を上げて立ち上がる。

「なんだ～　えーっと。前田？」

「違います、岩裂です」

「あー　岩崎」

「字が違います。爆裂の裂で、岩裂です」

「はいはい。岩裂、なんだ～？」

「なんで自習なんですか！？

普通、自己紹介とかなんじゃないんですか！」

そうだよ。さすが烈、秀才と称えられるだけの事はあるな！

と俺が思っていると、

「俺の基本方針は放任主義だから、自習でいいんだよ」

と荻久保先生は返答する。

まさかこんな答えに烈が納得するわけ、

「なるほど！」

納得したァァー！　しかも即答ですかっ！

納得。という表情を浮かべて烈は席に座る。

そういえば、こいつって勉強はできるけど違う意味でバカなんだよな。

荻久保先生は教室を出て行くとチャイムが鳴る。

おそらく休み時間を告げるチャイムだ。

で、俺は校内見学も兼ねて売店へと足を伸ばす。

しかしそこはすでに戦場と化していた。
在籍する学生の半数が売店で昼食を購入すると噂で聞いていたが、
これは。
その光景は目を背けたくなる。

なんたって、女子も男子も揉みくちゃになりながら昼食を買っているのだから、
男子が平気で女子の胸に手を当てたり、女子は女子で男子の股間を踏みつけて前に進んでるし、ここは無法地帯なのか。

「おい、突っ立てるんならどけよ」
「あっ、すませっ」

俺は目を見開く、目の前でタバコをむしゃむしゃと食べている人類がいる。
あれー？　タバコって食べ物だっけ？　タバコって未成年が買えたっけ？

あれ？

「早くどけよ」

少し苛立った口調で謎の人類は俺に催促するので、
俺は無言で謎の人類の進路から移動する。

「なんだよ。この学校は、常識あるやつはいないのかァァ！」
「あらあら、うるさい子羊ですね」

後ろを振り返ると、とても綺麗な女性が立っていた。

けど、服装を注視してみると、神社なんかで見かけることができる巫女装束を着ている。

「巫女さん？」

「はい、迷える子羊を導く者です」

「それはシスターさっ」

俺の言葉は途中で遮られた、だって巫女さんが俺の喉元にキラキラ輝くナイフを突き付けているんだもの。

「おやおや、子羊はおしゃべりが好きなんですね～
いけませんよ？　口は災いの元といいますでしょ？」

確かに言いますけど、俺の言おうとした事は間違いなく正しい事だと思うんですけど、っていうか神職の人が人にナイフ突き付けるってどうよ？

その時だった、巫女さんは右に視線をやって俺の目の前から姿を消した。

というか、上にジャンプした。

刹那、俺の眼前を一閃、なにかがきらめいた。

「ふぅ、キミ危なかったな」

そう言った凛とした顔立ちの少女。

彼女を見て俺は言葉を失う、確かにあの巫女さんはヤバかったけど、貴女も十分危険物を手にお持ちじゃありませんか！

そう、この人の手には立派な太刀があった。

刀身は美しい光を放っていて、よく手入れの行き届いた一品だ。

見ていて惚れぼれする、見ているだけなら。

「あのー　この学園ってまともな人っているんですか？」
「そうだな、きっと少数派だな。異常って呼ばれる部類が多数派だと思う」
「そうでうよねー　で貴女はどちら側で？」
「私？　もちろん少数派だ」
「ははっ、そうですか。では失礼します」

そう言って教室に戻ろうと背を向けた俺に彼女は声をかける。

「ちょっとついて来い」
「えっ？　ちょ、まっ」

彼女は俺の言葉を聞く事なく、俺の手を握りどこかへと誘拐した。

そして引きずられて着いたのは部室棟だった。
しかも部活名が書かれているプレートには「鍛冶屋」と書かれていた。
学校に鍛冶屋？　すっごい学校だね。そう思った。

「これ、お前にやるよ」
「これって」
「刀だ。名は「五月雨」という」
「かっこいい名前ですね。でも俺には必要ないですよ」
「私からの贈り物が要らぬと言うのか？」

と優しい口調で言っているのだけど、
なんで喉元に刃が突き付けられているんだろう？
うわぁー　この学校って本当に異常だよ。

こうして俺は成り行きで彼女から五月雨を受け取り、波乱の学園生活が始まった。

01　入学したらそこは何でもありでした。（後書き）

どうも、月冴（つかさ）です。
文法にすこし不安があるのですが、書いてみました。
感想など頂けると嬉しいです。

02　甘い話には乗るなって言うけど、現実そう上手くいかないよね。

「あのー　まだ名前聞いてなかったですよね？」

俺の声は部室棟の廊下に響いている。

そして俺の隣には太刀を腰にぶら下げた女子生徒が一人共に歩いていた。

「そうだったか？　私の名前は山本（やまもと）　稜姫（いつき）二年生だ。よろしくな」

「はぁー　よろしくお願いします。それよりこの学校は何なんですか？」

「さぁー　私もよく知らん」

「よく知らんって、その太刀は？」

「あぁこれか、これは自身を守るための武器だ」

凛と稜姫先輩はそう言う。

「あの暴力みっ、じゃない。あの巫女さんは一体何者なんですか？」

「あいつの名前は正直知らん」

「知らないんですか！？」

「こんなに生徒が多いんだ。自分のクラスの奴を覚えるだけで精いっぱいだ」

確かに、１０００人と1人を誇るんだからそりゃー無理あるか。

「通り名くらいなら知っているがな」

「通り名？」

まさかこのご時世にそんな古風な物がまだ生息していたなんて。

「そう、『誅戮の巫女』（ちゅうりくのみこ）というんだ」
「誅戮……罪ある者を殺すって意味か…えぇ、殺す！？」
「そうだが、それがどうかしたか？」

いや、どうかしたかって。
そんな通り名が付いてるって事は、もうすでに何人か殺られちゃってるって事じゃないですか！
なんでそんな人が平然と学校に登校してるの！
警察ぅぅ！　この税金ドロボーが！
ちゃんと仕事しろやァァ！

「おい、顔色が悪いぞ。保険室にでも行くか？」
「いえ、お構いなく」
「そうか、それよりお前も気をつけろよ」
「へっ？」
「誅戮の巫女に目を付けられたんだ。常に背後には気を配れよ」

えっ、それってまさか、闇打ち？
……死ぬよ俺。

「まぁ私も居るし、大丈夫だろうとは思うんだけどな」

あっはっは、と高らかに声を上げる稜姫先輩。
私も居るって、クラスどころか貴女とは学年も違うでしょ。
一年の俺をどう守るっていうの。

いや待てよ、いるじゃないか！
俺を守ってくれる頼りがいのある幼馴染が、女王様が！
すぐ隣にいるじゃないか！

あぁヤベェ、あいつが女神様に見えてきた。

「さて、そろそろチャイムも鳴る頃だろうし、ここで一旦お別れだな」

「あぁ、そうですね。っていうかこの刀持ってなきゃダメですか？」

「当たり前だ。私からの贈り物だし、それに死にたくはないだろう？」

「…はい」

俺に選択肢はないって事ですね。えぇ分かります。

―1年F組の教室―

教室に戻るとチラホラと空席が見える。

まだ帰ってきてないのか、もう帰れないのか、

想像する事を俺は躊躇わずにはいられない。

「俺はきっと運のいい人間だったんだな」

「何をブツブツ言ってんの？」

「いや別に、それよりも烈は校内見学してこなかったのか？」

「そんなの必要ないでしょ、っていうか秋人。

その腰にある物は何？　コスプレ？」

「えっ！　あぁコレは」

はっ！　俺は急いで視線を烈の顔に戻す。

……笑ってる。ドSの笑みだ。

俺は自然と冷や汗を掻く。

「へぇ～　秋人君にそんな趣向があったなんてねぇ、
なんでもっと早く教えてくれなかったのかな～？」
「いや、その。あのー　これには色々と事情があるというか、なんというか」
「うふふ」
「ちょ、まっ」

黒い笑みを浮かべて俺に迫って来る烈、とその時。

キーンコーンカーンコーン。

チャイムが鳴った。
それは救いの音色だった。

そしてまた不良教師の登場。

「は～い。さっきは自習なんて書いちゃってごめんね～
校長先生に叱られちった。んで、めんどくせーけど、先生から皆さんに伝えたい事があります。
もう気付いてる子もいると思うけど、ウチは異常者がウロチョロしてると～っても危険な学校なんですね～
だから、死にたくない奴は先輩に媚売って部活に入れて貰いなさい。そしてらまぁー少なくとも一月は生きてられるから、あとこの事部外者に漏らしたら、もれなく天国へ連れてってやるから、そこんところ覚えておくように。以上話終了～」

生徒は皆、鳩が豆鉄砲喰らったような顔をしている。
無理もない、いきなりとんでもない事口にしたからなあの先生、
俺も最初見た時は常識っつーメガネを粉々にされたからね、無理も

ない。

と、ここでなぜ俺がこうも冷静でいられるか、理由をお話ししよう。

そう俺はついさきほど、鍛冶屋と書かれている部室で稜姫先輩より刀を貰った。

ってことはだ。稜姫先輩の部活に入れて貰えたという事でまず間違いないと思う。

だからこうも冷静でいられるのだ。

「なぁー　烈。いい先輩教えてやろうか？」

俺は初めて烈より優位に立てると踏んで声を掛け、烈の方を見てみると、

燃えていた。

「ふっふっふ。面白い、面白い！　私の血が騒いでるぞォォ！」

「あー　ドS心に火が付きましたか」

ホント、お前一人でも難なく過ごせそうだな。

っていうか、お前ってもしかして多数派？

「ヤベェー　やっぱこいつは悪魔だわ」

―休み時間・売店前―

俺の目の前では銃を持った少女と剣を持った少年がバトってる。

格ゲーもビックリの光景だ。

銃弾を斬ったり、剣を紙一重で交わしたり、
非日常・非現実が目の前にある。っていうかその中に俺はいるんだよな。

売店はさっきの休み時間ほど混んでなく、難なくパンとフルーツ牛乳を買えた。
入学式のあとにすぐ授業があるのは進学校だからと思ってたけど、この事実を伝える為だったんだな。

っていうか、これって詐欺じゃねぇ？
あー　なんかもうどうでもよくなってきた気がする。

「おい」
「あぁ、先輩」
「説明は受けたな？」
「えぇ、まぁ」
「じゃあウチに入らないか？」
「そうするしかないでしょ？」
「そうだな。うんそうだ、さっそく行こうか」

そう言って先輩は俺をつれ、校舎を上がる。

あれ？　鍛冶屋は部室棟にあったよな？
なんで校舎を上がるの？

なんて思っていると、着いたぞ。と先輩の声が聞こえる、そしたら目の前には立派な木製のドアがあった。
そしてそのドアに埋め込まれているプレートにはこう書かれていた。

「ようこそ『風紀委員会』へ！」

やっぱ俺って、不幸なんだな。

02　甘い話には乗るなって言うけど、現実そう上手くいかないよね。（後書き）

やはり相変わらず文法に不安が残る月冴（つかさ）です。
今回は少し説明話という風に書いてみました。
未熟な部分多々あると思いますが、読んで頂きありがとうございます。

次話は今回説明できなかった部分を説明したいと思います。

03　成り行きほど怖いものはそうない。

『風紀委員会』とプレートに書かれていた部屋の内装はとても豪華絢爛だった。
絨毯は淡い赤色に金の刺繍が施され、シャンデリアが天所から吊り下げられて
壁も洋風なデザイン、まるで中世の世界に来たみたいな雰囲気だ。
そんな部屋の中央には十二席が円卓状に設置されていて、十人が席に座っていた。

「遅かったじゃないか、稜姫（いつき）」

と円卓の一番奥にいる白髪の少年が声を掛けてきた。

「すいません、しかし空席だった十二席候補を連れてきました」

あいさつして、と俺を促す稜姫先輩。

「ど、どうもこんには。一年の北条秋人です」
「一年か〜　若いと思うんだけど、委員長？」
「稜姫が連れてきたんだ。それなりの資質はあるだろう、しばらくは見習い扱いということだったら問題ないでしょ」

どうやら白髪の少年は風紀委員会の委員長らしい、
それになんか勝手に話進んでるな〜
でも、口をはさめる空気じゃないしな。

「んじゃ、その子は見習って事で」
「はい副委員長」

「そうそう、ついでに第二校舎の中庭で二年が暴れてるって苦情が入ってるから、対処しといてよ」
「分かりました」
それだけの会話をしたら稜姫先輩は俺を連れて風紀委員会の部屋から退室し、
中庭に向けて走り始める。

「何が何だか、ってか先輩って鍛冶屋じゃないんですか！？」
「何を言う、私は風紀委員だぞ？　鍛冶屋には刀を預けてるだけだ」
「俺の早とちり、ですね」
「全くだ。それより中庭に急ぐぞ」
「で、でも俺刀なんて使った事ないですよ～」
「心配無い、ウチに異常者が多いのはこの土地のせいだ。
この土地にある程度いると潜在能力が著しく解放されるから秋人もそれなりに強くなってるさ」
「あー　だからここには異常者が多いんですね」
「そうだ。それを取り締まるのが風紀委員会の役目ってわけさ」
「なるほど。で、なんで俺はその風紀委員の見習ないなんでしょうか？」
「私がお前を気に入ったからだ」

なんて単純な理由、それだけにもう呆れて言葉が出ない。
そんな事を話していると、中庭が見えてくる。
中庭では金髪の少年と右目に眼帯をした少年がメリケンサックと木刀でバトっていた。
それを確認した稜姫先輩は、「そこの二人ー！」と叫びながら三階の窓から飛び降りる。
俺はそれを口を開けて見届けようと思う。

っていうかこの右手についてるヒモは？
視界に身に覚えの無いヒモが映る。
・・・・あっ
気付いた時には俺も窓から飛び出していた。
というかみちずれ？
「ぎゃあぁぁぁぁぁ！　落ちてる～」
「やかましい。これくらいなんだ」
先輩はそう言って地面に着地する。
先輩の着地と同時に足元のアスファルトは窪み、ヒビが走る。
そして先輩の後ろに俺は頭から突っ込んだ。
数秒後。
「死ぬかと思ったー！」
「ほら、大丈夫だった」
「いやいやいや、普通は死んでるからね！？」
「だが問題ないと事前に言っただろう」
「言ったけど、言われましたけど……いや、もういいです」
「そうか？」
俺と先輩がつまらん漫才モドキをしていると、
少年二人がこちらに近づいてくる。
「おい、なんか文句あんのかよ？」
「そうだぜ、俺らの戦いを邪魔するんじゃねぇーよ」

「風紀委員だ！　お前らこそ何を言うか、校則で一定時期以外の戦闘は禁じられているだろうが」
「うっせー　文句あんなら」
「お前らごとぶっ殺す！」

えっ、ら？　お前らごと！？
俺まだ一言も文句言ってないんですけどー

「死ねやー」

メリケンサックをつけた金髪の少年は先輩に向かって、ボクサーもビックリの右ストレートを繰り出す。
が、先輩は眼前まで引きつけて紙一重のとこでかわし、太刀の柄で金髪少年の腹部を一突き、

グハッ！

胃液、だろうか。とにかく口から血ではない液体を吐きだして地面にうずくまる。

「よくもやりやがったな！」

眼帯の少年は先輩に向かってそう啖呵を切る。

「ちょっと待て、お前の相手はコイツがする」

そう言って先輩は俺を指差す。
なんで〜　これって責任転嫁ってやつなんじゃないだろうか、
だって俺まだあの人たちに一言も発してないし、
別に俺はケンカ売ってないし、

見習も勝手に決まっちゃった事だし、
俺は何一つ関係ないじゃん。

「どっちでも構わねぇー　とにかく死ねやァァ！」

あぁ、でも現実はそうもいかないんですね。

俺は刀を鞘から抜く、成り行きで。
五月雨の刀身は綺麗だった。もうそれ以外の言葉では表せないほどに。

そして眼帯の少年は信じられない跳躍を見せる。
地面をたった一蹴りで五メートルは上空に跳んで、木刀を構えて俺目掛けて落下してくる。

木刀と五月雨がぶつかり合うと、木刀は豆腐の様に斬れる。
それほど力を込めていないのに。
結果、木刀の後ろにいる眼帯少年の眼前まで五月雨の刀身は迫る。

ヤベェ、どうしよう。

人を殺してしまう恐怖を感じた瞬間、
稜姫先輩が眼帯少年を華麗な空中飛び膝蹴りで蹴り飛ばして、眼帯少年の命を助けた。

「あ、ありがとうございます」
「なぜ礼を言う？　私はただ未熟者の人殺しを止めたまでだ」

稜姫先輩は少し不機嫌な素振りを見せる。
多分、気に入ったとか言ったのにこの程度の俺に失望しているんだ

ろう。
俺はため息を吐いて五月雨を鞘に納める。

「さて、あいつらを拘束せねばな」
「拘束、ですか」
「当たりまえだ。また暴れられては元も子もないだろう」
「そうですよね～」

少し気は引けるが、俺は眼帯少年の手を後ろに回して手錠をかける。
心の中で謝りながら。

「後は他の者がしてくれる。行くぞ」
「それよりも、聞きたい事があるんですけど」
「なんだ？　言ってみろ」
「風紀委員会とか、この学校についてもっと教えてくださいよ」
「あぁ、別に構わないよ」

そのあと、中庭のベンチに腰かけて話を聞いた。

先輩が言うには、
この土地には不思議な力が宿っていて、この土地にいる間は潜在的能力が目覚めるらしい、
それは大きく分けて二つあるそうだ。

・肉体などを超人化させる　人体強化系。
・俗にいう魔法・超能力が使えるようになる　神経強化系

今拘束した生徒はどちらも人体強化系で、その中でも下級の輩たちだそうで、
よく入会テストの対象になるレベルだそうだ。

で、無事拘束できた俺は一応合格らしく、これから風紀委員を名乗っていいと告げられた。

「風紀委員会の詳しい話は放課後でいいだろう、ちょうど定例集会もあるしな」

「そうですか、さっき行ったところに行けばいいですか？」

「いや、その下の階にある大広間で定例集会はあるんだ。さっき行ったところは言わば幹部専用の会議室だよ」

「でも、なんでそんな所に俺を連れて行ったんですか？」

「私がその幹部の一人だからだ」

「あー　なるほど。……そうだったんですか！？」

「言って無かったか？」

あっはっは。とまた笑う。

この人は本当に説明不足な人だな。

「じゃあまた後で会おう」

「はい」

こうして俺は中庭から教室へ帰ったわけだが、

入学早々授業をサボってしまっている事をすっかり忘れていた。

０３　成り行きほど怖いものはそうない。（後書き）

感想など頂けると幸いです。

０４　努々忘れてはいけない事　それは現実の過酷さですよ。（前）

―放課後―

俺は授業をサボった罰として反省文が宿題に追加されただけで済んだ。

そして俺のサボった授業内容は、この学園においての注意事項だったらしい、

俺が聞かされた内容とほぼ同じ事の説明があったのだ。

そしてどうも、この学園に第三者が入る事は不可能なんだそうだ。

理事長が最強の神経強化系だそうで、この学園を特殊な結界で覆っていて、第三者がそれに触れると何をしようとしていたのかを忘れて家に帰るんだそうだ。

だから、保護者には前もって来る事を学園側に知らせるようにとの事も言われたらしい、

そしてお優しい事に、転校届を三日後までに出せば試験もなしに好きな高校に転校させてくれんだとか。

そして俺は今、稜姫（いつき）先輩に言われたとおりに大広間に来ている。

大広間は極々普通の教室、でもちょっと広かなというほどの造りだ。

大広間にはすでに何十人もの人が集まっていて、パイプイスに座っていた。

俺は一番後ろにポツンと置いてあるパイプイスに座った。

そしたら先程上の部屋で見た面々と稜姫先輩が入室して、黒板の前に置かれていたイスに座り、

「今から風紀委員会定例集会を始める」
と副委員長が声を上げる。
「そして今日は素晴らしい知らせがある事を前もって諸君に伝えたい、長らく空席だった十二席目がついに決まった」
その知らせを聞いた途端、大広間がざわめく。
「十二席に就くのは、北条秋人一年生だ」
その瞬間、視線が一番後ろに座っている俺に集まる。
しかも、殺気を帯びた敵対という部類に入るであろう物が。
一応呼ばれたので立ちあがると、一層視線が痛い。
「は、はい。北条です」
「さぁ、前に来て」
前に来ると稜姫先輩が立ち上がり、
「こいつが私の相棒になる、まだ新人だが五月雨に選ばれたんだ。諸君らも文句は無いとは思うが念のために言っておく、私もこいつを選んだ事を忘れないでほしい」
稜姫先輩の言葉を聞くと、なんとも悔しいという表情を浮かべ、視界に入る風紀委員全員が拳を握っている。
お、俺。間違いなく狙われてるよね？
もう憎くて憎くて堪らない顔してるしね、
これ、俺、俺ホントヤバイよォォ。

「さぁ、意気ごみでも言ってやれ」
と稜姫先輩は俺の背中を押す。
いや、これ、下手に刺激したらホント爆発しそうなんですけど、言えないって、一言たりとも許してくれそうにないんですけど、
そう思う俺は小声で稜姫先輩に尋ねる。
「辞退する事は出来るんですかね？」
「私の想いを踏みにじると言うのか」
と腰にぶら下げている太刀の白刃をチラリと見せる。
その意味は重々承知できた。
反論は許さんという事だ。
「えぇ～　じゃ、若輩者ですが、風紀委員として精一杯頑張っていきたいと思います」
若干声を震わせながら俺は勇気を振り絞って言った。
それを聞いて俺の耳には歯ぎしりの音と共に、稜姫先輩の「よく言った」というほめ言葉が聞こえた。
―その後、幹部室―
「いや～　改めてようこそ風紀委員会へ、稜姫から詳しい事は聞いているだろ？」

「はい。大まかな事は」
「何か質問はあるかな？」
「さっきも言ってたんですけど、十二席ってなんですか？」
「十二席ってのはね。君の役職さ。奇数の席に座る人間が自分の補佐として偶数の席を与える。君は十二席だから、十一席に座る稜姫の補佐だね」
「だから稜姫先輩が僕を気に入ったって」
「まぁそう言う事だね。風紀（うち）委員会は基本フリーだからさ、校則違反してる奴見つけたら捕まえといてよ」
「そんなんでいいですか？」
「いいの、いいの、これが委員長の方針だから。ね？」

白髪の少年改め、委員長はコクッとうなずく。
どうやら口数が少ないようで、金髪の少年っていうか副委員長が殆ど進行を任されているらしい。

「まっ、稜姫の元で精進してね。ってことで今回はお開き～」

副委員長はなんとも軽い口調で終了を宣言した。
そして次々と幹部が退席している中、稜姫先輩は最後まで残っていた。

「え～と、行かないんですか？」
「我々は最後に出るんだ」

あー　十一席と十二席だから。
結構厳しいな～

そして部屋に残ったのは俺と先輩の二人。

「さぁ行くぞ」
「はい」

―下駄箱―

「今日はもう帰れ、入学式もあったし疲れたろ？」
「いいんですか？」
「あぁ、その変わり明日からはビシバシ働いてもらうぞ」
「了解、じゃあお先に失礼します」
「あぁ」

こうして俺の高校初日は幕を閉じた。
そして帰宅したのは七時過ぎ、さぁ宿題をしようと宿題を確認すると、
進学校だからだろうか、宿題の量が半端伽ない。
しかも反省文もときたら、これ今日中に寝れるのか！？　ってくらいの量だった。
結局、俺がベッドに横になれたのは日付が変わって一時間と三十七分後だった。

０４　努々忘れてはいけない事　それは現実の過酷さですよ。（前）（後書き）

（前）っていうのは前編って意味です

05　努々忘れてはいけない事　それは現実の過酷さですよ。（後）

―御南茂学園―

朝、今日の天気は快晴だが俺は曇りだ。
なんたって睡眠時間は六時間、もっと少ない人もいるだろうが俺にとって眠るという行為は、絶対不可侵の聖域扱いで、邪魔される事や、まして睡眠時間を削るなんて耐えがたい事なんだ。

「おっはよー！」
「あぁ、烈か」
「なんだなんだ、青春を謳歌してる高校生が朝からそんなやつれて……もしかして昨日ヤッちゃった？」
「誤解を招く事を平然と言うな」

怒る気さえしない俺は低い声で注意する。

「本当に元気ないな」
「眠いんだよ」
「宿題だろ？　秋人は本当に勉強苦手だもんな。なんで進学校を選んだんだよ」
「俺が選んだ訳じゃねぇ、親が勝手に願書すり替えてただけだ。それにギリギリ合格だったはずだし」
「へぇ～　まぁ私は新入生を代表してスピーチしたほど秀才だがな」
「……性格は最低だけどな」ボソッ。

こうして地獄の様な二日目は始まった。
そう、一時間目早々に風紀委員としての仕事が舞い込んで来たのだ。
一時間目の開始を告げるチャイムが鳴り終わると、「一年Ｆ組の秋

人、仕事だ来い！」と稜姫(いつき)先輩からのラブコール。
それを聞いた烈に胸ぐらを掴まれて、「後でキッチリと説明ね」と黒い笑顔で脅され、
稜姫先輩には「遅い！」とビンタを一発。

そして校則違反をした二年生三人には逃げられるわ、始末書全部押し付けられるわ、罰として三日間放課後見回り言い渡されるわ、風紀委員の先輩方からはミッチリと風紀委員のいろはを教えられ、結局解放されたのは昼休みで昼食を逃してしまった。

―教室―

「あー　もうイヤだー！　ただでさえ寝不足でイライラしてるってのに！」
「おいおい、私に愚痴る前に言う事があるだろ？」

俺は席に座り隣の烈に愚痴をこぼしている。
烈はいかにも不服の表情を露骨に表していた。

「あぁ、風紀委員の事」
「あぁ程度じゃないだろ？　私に黙って何楽しそうな事してるんだよ、それにあの放送女の声だったよな？」
「そうだけど、それがどうした？」
「誰だ？」
「先輩で上司」
「それだけか？」
「それだけ」

烈は俺の言葉を確かめるかのようにジーッと睨み、ふぅ。と溜息を吐いて「まぁいいだろう」と言葉を零す。

「それにしても、秋人が風紀委員の幹部ねぇ～　私も入ってみようか」
「風紀委員は随時募集中らしい、申請書を出せば試験受けさせて貰えるって聞いたぞ」
「よし、決まった。私は風紀委員になって楽しむ！」

そう言って烈は教室を飛び出した。
善は急げ、か。

「あぁ……本音出ちゃってるよ。面接で落ちそうだな～」

と俺は冷静に烈を分析してみる。

突然だが、風紀委員には携帯が配布されている。
それは風紀を守る為に迅速な行動が求められているからだ。
そしてその携帯が今俺のポケットで鳴っていた。

「出るべき……だよな」

俺はあからさまにテーションを落として携帯に出る。

「はい、北条」
『遅い、鳴ったらすぐに出んか』
「すいません。で、何か用でも？」
『用が無いのに掛けるわけないだろう、一年校舎の中庭で乱闘だ。迅速に拘束しろ』
「了解」

はぁ～　一年で風紀委員は今のところ俺だけなんだったっけ、だか

らって一年校舎で起こった面倒事全部押し付けないでほしいな～
身が持たないから。

なんて内心で愚痴ってると、一年校舎の中庭が見えてきた。
昨日二年校舎の中庭を見たけど、やっぱり造りは同じか。

ここで、御南茂学園の説明を。
この学園には一年、二年、三年校舎と学年にそれぞれ校舎一棟が与えれていて、基本その学年校舎で勉学に励んでいる。
もちろん体育館は全学年が平等に使用する事が出来る。（ちなみに体育館は二つある）
さらに小さいが湖やちょっとした山に森林、それに合わせた宿泊施設まであって、夏には湖の浜辺と宿泊施設を生徒のみに開放するらしい。
そして、風紀委員は基本フリーだが各学年は自分の校舎が管轄だ。
一年が入学したての頃は二年生が数人見回るそうだが、一年の風紀委員が出来たことでお役御免だそうだ。
まぁ俺一人に押し付けたってことなんだけど。

そんな訳で今俺は中庭に立っている。

「風紀委員だ！　そのこの四人、今すぐ戦闘行為を止めなさい！」

俺の目の前には同学年の生徒が四人、どうも他と比べて潜在能力が早く目覚めたらしく、力に酔っている。

「こんなの使わずにはいられねぇーだろうが！」
「そうだよ。僕はいっつも、いっつも虐げられてきたんだからこれくらい」
「お前で俺の力を試させて貰うよ」

「僕はお前なんかの命令は聞かないぞ！」

ここは進学校じゃなかったのか？

何でこんなに風紀っていうか、生徒の素行が悪いんだよ。

今まで我慢してきたのが爆発でもしたのか？　……そうかもな。

「あー　大人しく投降しなさい、そうしたら大目に見てやるから」

「「「「ふざけんなよォォ！」」」」

四人は額に青筋を浮かべて激昂して俺に向って走り出す。

一人は手を地面に向けて、石粒を空中に浮遊させ、一人は鉄パイプを手に握り向かってきて、残りの二人は素手で向かって来る。

どうも一人は神経強化系で、残る三人は人体強化系らいい。

人体強化系はともかくとして、神経強化系とは初めて戦う事になる。

見て思うに、どうも念動力（サイコキネシス）かと思う。

「あの石粒が飛んでくんのか、めんどいな」

「喰らえー！」

石粒が三人を追い越して俺に迫る。

ちっ！

俺は五月雨を抜いて石粒を退く、石粒は退いたもののまだ肉体強化系の三人が残っている。

それにまた石粒を浮遊させ始めてやがる。

「えぇい、本当にめんどくさいな！」
俺は鉄パイプ野郎の鉄パイプを使い物にならないくらい細かく斬り刻み、峰うちで気絶させる。
「後ろがガラガラだぜだよ！」
「知ってるよ、それくらい……ッ！」
俺は瞬時に振り向き、五月雨を構える。
さすがに刀と素手では勝負にならないだろうと思っていたのに、コイツは素手のままパンチしてきた。
「僕の拳は鉄の様に堅いんだぞ」
と興奮気味に言う。
普通ならこのまま拳と刃を交えるのだが、五月雨の切れ味は鉄の塊さえも両断してしまう代物、このままだと俺は間違いなくこの少年の拳どころか命さえ斬ってしまう。
なので、俺は拳を避けながら解決案を考える。
だが、その暇すら与えてはもらえなかった。
素手で向かって来ていたのは俺の目の前にいる奴だけじゃない、もう一人いたんだ。
そいつは今俺の後ろに拳を構えて待っていた。
どうも俺は追い込まれていたらしい。
「どうだ！　これが僕の力だ」
まったく、本当にめんどくさい。
こいつらも優等生って呼ばれてた部類なんだろうけど、こんなに性

格って変わるもんなのか？
親が見たら泣くな、絶対。
っていうか、何か打開策考えないとな。
斬る訳にもいかないし、ホント困ったな。

そう思っている時だった。
聞き覚えのある声が俺の耳に入ってきたんだ。

「私に任せておけ～！」

と上空から声がする。
見上げるとスカートを押さえた女子生徒が落下してきていた。

そう、女王様のご登場だ。

烈は俺の後ろに待ち構えていた奴の数メートル前に着地すると同時に地面を蹴って、ミサイル並みのスピードでそいつに突進する。もちろんそんなバカげたスピードで突進されたらなんだろうと吹き飛ぶだろう。
案の定、そいつは壁突き破って校内に姿を消し、そいつの近くに居た奴にも突進、そして同じように校舎の壁を突き破って校内に姿を消す。

こえーよ。
あれ死んだんじゃないか？
っていうか手加減っていう物を本当に烈は知らないんだよな。
さて、俺の方もそろそろ方をつけるか。

俺は左右に身体を振って、瞬時にスピードを上げて右の脇腹当たりに柄の先で一突き、稜姫先輩がやっていた事と殆ど同じ要領でやっ

てみた。
少年は昨日の金髪少年と同じように地面にうずくまる。
で、俺は烈の方を見る。
「何してんの？」
「風紀委員の仕事してんの」
「お前が風紀委員？」
「そう、試験に見事一発合格。秋人と組めって稜姫先輩って人に言われたんだ」
マジ。女王様と組めって稜姫先輩俺の安全考えてくれてんのか～？
「こんな雑魚に手間取るなよな」
「お前、手加減ってものをだな」
「大丈夫、大丈夫。あれくらいじゃ死なないって先輩言ってたぞ、まぁ秋人に限っては別とも言ってたけど」
「まー　俺は刀だしな。斬れば血は出るし」
「いいなー　私も武器持とうかな」
「ダメェェ！　それは止めてお願いだから」
「えー　なんでだよ～？」
そりゃー　お前に武器なんて持たせたら所構わず死体が出そうだからに決まってんだろ、
実際、中学ん時は何人男子病院送りにしたと思ってんだよ。
トラウマで転校した奴も出たほどなんだぞ。
そんな奴に凶器持たせたらそれこそ兵器だよ、最終兵器女王にでもなるつもりかお前は。
「そんな事より残り一人残ってんだから」

「へいへい、アンタに言われずともそれくらい分かってますよ」

俺と烈は残り一人、神経強化系の奴を睨む。

「ま、参りました」

あっけなく負けを認めた。

そう言えばこいつ俺達と同じ中学にいたな、烈の恐ろしさは分かってるってことか。

そして俺と烈は四人を拘束して事務の人に身柄を引き渡した。

「で、まぁこれからよろしく」

「何改まっちゃってるんだよ～　私達の仲じゃないか」

と、烈は背中を叩く。

俺の学園生活は本当に苦労の絶えない物になる事が、今この時点で確定した。

０５　努々忘れてはいけない事　それは現実の過酷さですよ。（後）（後書き）

少し書き方を変えてみたつもりなんですけど、変じゃないでしょうか？
感想など頂けると嬉しいです。
あと、次話は誅戮の巫女を出したいと思います。

06　巫女さんだって怒ると怖いよ。

―売店―

早朝の見回り当番だった俺は朝食を買いに売店に来ている。
そして俺の目の前に巫女さんが一人。

「あら、またお会いしましたね子羊さん」
「ははっ、奇遇ですね～　でも僕はこれで失礼しますんで」

俺は一人称まで変えてこの場を去ろうとしたが、肩を掴まれて静止させられた。

「な、何か用でもあるんでしょうか？」
「勿論、あなたの様な人は私が殺らないとね」
「……理由を窺う事は出来るんですかね？」
「それくらいよろしくてよ。理由はね、貴方の顔です」

やっぱ顔（これ）ですか、昔から不良と勘違いされてきたこの顔、今までこれで避けられてきた事もあったけど時間が解決してくれた。
だけどまさかこれが原因で命を狙われるなんて事はなかったぞ！

巫女さんは以前俺の喉元に突き付けられたナイフを再び取り出し、俺の喉目掛けて一閃。

俺は一歩後ろに下がって喉を斬られずに済んだが、薄皮一枚持ってかれた。
喉仏当たりから少し出血している。

笑えねぇー
これ半端なく怖い。
巫女さんって優しいイメージだっただけにギャップがあり過ぎるし、何より目がマジだ。

「あのー　一応風紀委員なんで取り締まりますよ？」
「あら、風紀委員だったんですか？」
「えぇ。まぁ一昨日から」
「そうでしたか、それは失礼しました」
「分かっていただけたなら」
「でも、気に入らないんで」
「えっ？」

寝ぐせで跳ねていた前髪がバサッと地面に落ちた。

……狩られる！？

瞬間、俺は反射的に五月雨を抜刀して巫女さんに白刃を向けた。

「あら、闘るきですか？」

巫女さんはナイフを床に捨て、両袖から短剣を取り出して構える。

「闘るきって、アナタから仕掛けてきたんでしょうが」
「そうでしたか？　そんな些細な事覚えていませんね」
「些細って、全然些細な事じゃないですよ！　人命がかかってるんですから」

巫女さんは俺の言葉を無視して突然立ち向かって来る。

ガキンッ！

短剣と五月雨がぶつかる。
しかし五月雨と刃を交えたのは左手に握った短剣一本、もう一本は右脇腹目掛けて宙を駆けている最中だった。
俺は疑問に思う、鉄の塊を両断できる五月雨の刃、それなのにこの短剣は刃こぼれ一つしていなかった。

この人、できる！

刹那、短剣の軌道上に刀が一本。

ガキンッ！

気が付くと、稜姫（いつき）先輩が俺と巫女さんの間に立って短剣を防いでくれた。

「あら、もう来たんですか」
「私の嗅覚を侮ってもらっては困る。それに上級生が下級生に手を出すとは」
「別にいいじゃないですか、スキンシップの一種ですよ。稜姫ちゃん」
「その呼び方は止めろと以前にも」
「あらあら、照れちゃってますか？　可愛いですね～」

この二人、もしかして顔みしりなんじゃ。

「稜姫先輩、知り合いですか？」
「違う」「そうですよ」

二人は同時に正反対の事を言う。
表情から判断するなら、頬を少し赤らめて否定している稜姫先輩は嘘を吐いているな。
一方の巫女さんは笑顔、この人は嘘吐いてないな。

「先輩、この巫女さんは一体誰なんですか？」
「私はこんな奴の事は知らないと言っているだろう！」
「もう、分かってますから」
「うっ……」
「稜姫ちゃん、後輩に迷惑かけたらダメですよ？」

いや、アンタはその後輩を殺そうとしてたんだよ！？
それ言っちゃダメでしょ！

「こいつは私の幼馴染だ。名前は生島　奈々（いくしま　なな）、生徒会副会長をしている」
「副会長ですか！？」
「そうですよ、これからよろしくね～」

俺は稜姫先輩に小声で、

「俺たちって校則違反している生徒を取り締まるんですよね？」
「あぁ、それがどうした？」
「副会長制服じゃなくてコスプレしてるんですけど」
「生徒会は基本無視しろ、厄介事はごめんだ」

とヒソヒソ話をしていると、「聞こえているんですから、私に聞けばいいでしょう？」と副会長は言った。

「じゃ、じゃあ聞きますけど、なんでコスプレを？」

「私の実家が神社だからですよ」
「生徒会と風紀委員会って仲が悪いんですか？」
「会長と委員長は兄妹なんですけ、ここ最近喧嘩しているようで、今は仲悪いですね」
「最後に、なんで巫女さんなのに、誅戮なんて物騒な通り名がついてるんですか？」

巫女さんは黒い笑みを浮かべて「知りたい？」と俺に質問してきた。

ゴクン。と唾を飲み「け、結構です」と断る。

怖くて聞けないって、聞いていいよ～　とか言われても聞いていいい顔じゃなかったし。

「じゃあ私は仕事がまだ残っているので、これで失礼しますね」
「は、はい」

あぁ、最後に。私の事は奈々と呼んでね。と言って二年校舎の方へ歩いて行った。

「何なんですかあの人は」
「分からん。長い付き合いだが未だに理解できん部分がある」
「先輩も大変ですね」
「全くだよ」

―教室―

俺は今烈と見回りの相談をしている。
何故かというと、俺は三日間放課後の見回りという罰を科せられていたからだ。

「なんで私は秋人の罰に付き合わされなきゃいけないんだよ！」
「相棒なんだから仕方ないだろ！」
「私が入る前にミスったんだろ？　だった一人でやれよ！」
「だ・か・ら、相棒なんだから付き合えって！」
「い・や・だ、って言ってんだろ！」

こんな言い争いをかれこれ三十分もしている、まだ一時間目のチャイムは鳴っていないものの、あと数分で定刻だ。
それにクラスメイト達は俺達の言い争いを面白そうに観戦している。
正直恥ずかしい。

「……仕方ないな、幼馴染として今回は付き合ってやる。次はないぞ？」
「あぁ。俺も学習くらいはする」

ようやく決着した。

―放課後・廊下―

俺と烈は放課後の見回りをしていた。
それこそ下らない世間話をしながら、それが角を曲がって視界に飛び込んできた物を見たら会話は消えた。

赤い液体がそこら中に飛び散っていて、制服を着た少年が床に三人倒れている。
そしてその三人を踏み台にでもしているかのように、返り血で赤く染まった巫女装束の奈々副会長は立っていた。

「な、何をしてるんですか？」

あまりに衝撃的な画に俺は恐る恐る聞いてみる。
烈に至っては対抗心なのか、目が燃えてた。

「何って、悪者退治に決まっています」
「悪者退治って……」

誰がどう見ても貴女が完全に悪者ですよ、この状況。
これで貴女が正義だというのならば、世界の終焉はあと一歩ってとこまで来てますね。

そしてこれを目撃してしまった事で、まさかあんな事になろうとはこの時の俺は思いもしなかった。

０６　巫女さんだって怒ると怖いよ。（後書き）

次話、対決です。

07　厄介事ほどそこら辺に転がってる物はない。

奈々副会長と廊下で対面してから数分後、俺と烈は生徒会室に案内された。
風紀委員会の幹部専用の部屋と同じようなイメージかな、とか思っていた俺の想像はこれまでに無い衝撃で打ち砕かれた。
そう、生徒会室の扉を開けるとそこは、メルヘンの世界だった。
壁紙は丸で絵本のようなタッチで描かれた風景、さらに備品全てが壁紙に合わせられた色をしている。
そして委員長の女版がお姫様のコスプレをしてイチゴの形をしたイスに腰掛けていた。

「あれ～　奈々ちゃんその子らは～？」

本当に高校三年生か？
小学生低学年だろうどう見ても、喋り方だって幼いし、っていうか奈々さん（副会長）が巫女で委員長の妹（会長）がお姫様、この生徒会はコスプレイヤーの仲好し会か～？

「すいません、仕事を見られたので連れてきたんです」
「あ～　もしかして風紀委員？」
「はい」
「でも見ない顔だけど」
「新入生です、こちらが北条　秋人、その隣が岩裂　烈」
「へぇ～　お兄ちゃんの部下か～　奈々ちゃんの事言わないでくれるかな～？」

いきなりのお願い、しかも自己紹介なしですか。

「おい、ふざけんじゃねぇーぞ！　私達の仕事横取りしといてお願いで済むかよ！　土下座しろ！」

いや、それは幾らなんでもストレートすぎないかな～
もっと言い方があると思うんだけど、それに俺の隣には奈々さんが居るんだけど～！」

「貴女！　会長に失礼でしょう！」
「んだとぉ～！　私はただでさえ機嫌が悪いんだよ！　今は！」

あー　俺に付き合わされたからか。

「口のきき方が分からないのかしら」

そう言って奈々副会長は両袖から短剣を取り出して構える。

「ほぉー　二刀流か、面白い……ッ！」

烈は傍に置いてあったコート掛けを手に持ち構える。
つーかコート掛けで戦おうというのか、相手は真剣だぞ。

生徒会室が二人の放つ刺々しい殺気で重苦しい空気で満ちた時、

「「いざ、参る！」」

二人は同時に開戦宣言をして、一歩を踏み出した瞬間だった。
突如ドアが開き、稜姫（いつき）先輩と委員長が入室してきたのだ。

二人の入室により、空気は流れた。

「あら、お兄ちゃん。なんの用かしら」
「俺の部下が世話になってると聞いて……」
「こんな下っ端の為にわざわざ風紀委員会の委員長が来るなんてねぇ～」

生徒会長はなんとも憎らしい口調で委員長に物申す、ホント兄妹喧嘩してたんだな。

「ただの部下じゃない、彼は新しい十二席だ」
「！　へぇ～　一匹狼の稜姫ちゃんの相棒か～」
「それに、校内の風紀を乱すのは頂けない、容認はできんぞ」
「では、私達生徒会に盾突くと？」
「察しろよ、妹」
「考えてよ、お兄ちゃん」

二人は火花散らし睨み合う、完全に俺らは蚊帳の外って感じだ。
そんな状況の打開を図っていたのは別に俺一人じゃなかった、稜姫先輩も烈、それに奈々副会長もだった。
共通意識を持っていた俺達は目で会話する。

（先輩、ここは年長者が切り出すのがいいかと）
（私は秋人に賛成だ！　一年が口出しできる状況じゃないしな）
（いや、私もあの中に入るのは気が引ける。ここは生徒の代表であるところの生徒会が副会長に）
（あ～　稜姫ちゃんズル～イ、いま絶対逃げたよね？　私も嫌だよ～）

皆解決はしたいと思っていたが、どうも犠牲になる気はないらしい。

（でも、これなんとかしなきゃ前進しませんよ？）
（そうよ、だから先輩方頑張ってくださいよ）

烈は少し興奮が冷めて平常に戻ったようだ。
少し熱くなると性格も口調も変わるのが烈の悪いとこだ。

（何を言う、後輩も根性みせんか！）
（私も稜姫ちゃんと同意見）
（っていうか奈々副会長、稜姫先輩と一緒の時って口調とかキャラ設定変わってませんか？）
（別にいいじゃん、私は稜姫ちゃんの前ではこういうキャラがスタンダードなの）
（（（へぇ～））））

稜姫先輩も含めて俺らは、そうなんだー。と心底思った。

そんな視線会議をしていると、委員長と生徒会長の舌戦に進展が起こった。

「あ～　お兄ちゃんの分からず屋！　もう全面対決よ！」
「いいだろう受けてやる！」

あー　なんかバトル展開ですね～
定番っていうか、なんていうか。
結局苦労するのは下の人間なんだよな。

「あのー　委員長。校内の風紀を守る俺たちがバトっていいんですかね～？」
「構わん、権力を我が物顔で振り回すロリっ子を懲らしめる為なら

神とて許す！」
「私はロリじゃないもん！　ただ成長期が遅れてるだけの女の子なんだもん！　それに風紀委員会が役に立ってないから奈々ちゃんが代わりに執行してあげてるのよ！　感謝されこそされ非難される覚えはないわ！」
「そんな越権行為が許されるとでも思っているのか！？　迷惑するのは副会長だぞ。可哀想に、非常識な上司を持つと部下は絶え間なく苦労を強いられるんだよな」

「なによ！」
「なんだよ！」

「「こうなったら、（稜姫！）（奈々ちゃん！）闘るぞ！」」

「「はい」」

稜姫先輩と奈々副会長は委員長と生徒会長の命令を受けて剣を交える。
神速、まさに二人の剣劇はそうだった。
風を裂き、火花を散らし、場の空気をさらに悪化させる。

「なぁ秋人、私達は何をすればいいんだろうな」
「さぁ、でも確実なのは。厄介事には首突っ込まない方が良いってことだろ」
「「はぁ～」」

さっきまでは稜姫先輩も奈々先輩もあんなに仲良かったのに、いざ仕事となるとホント容赦ないな～
公私の区別はくっきりと決めてるんだな。凄いんだが凄くないんだか分らん二人だ。

「お兄ちゃん、私達も始めましょうか？」
「手加減は、しないぞ？」
二人とも絶対零度をも超える冷たい笑みを浮かべた。
そこで俺と烈の意識は途絶える。

そして目が覚めたのは保健室のベッドだった。
そして何故か、何故か隣には烈があられもない姿で横になっている。

何コレ！？
なんの罰ゲームですかー！
こんなのちっとも嬉しくねぇーよ？　別に照れてるとかそういう次元のお話じゃないんだって、だってこれ今この状況で烈の目が覚めてみろよ。
死刑確定だよ、もうホント冗談抜きで俺死ぬから、しかもなんで俺の右腕ががっちりと抱かれてるんだよ！
変なフラグ立てんなコンチクショー！
誰もこんなウハウハなシチュ望んでねぇーって、誰一人として幸せになれないから、だから神様ヘルプ・ミーィィ～！

「あ～　なんだかよく寝た気がする」

そんな台詞を言って目を覚ました烈の視線が固まる、俺と目があったのだ。
ゼロ距離ではないものの、顔の距離は鉛筆一本も無い超至近距離。
お互いの呼吸がよく聞こえる。

そして烈の顔はどんどん赤くなり、目は混乱していく。

「キャーーーーー！　何してんだこの変態幼馴染がァァァァ！」

俺は言葉一つ発することさえできずに、意識がまた途絶えた。

07　厄介事ほどそこら辺に転がってる物はない。（後書き）

なんか対決とか言っちゃって期待させてすいません！
次こそは、次こそは対決（バトル）させます！

08　タバコは大人になってからだよね。

結局、委員長と生徒会長の喧嘩は決着付かずに終わり、委員長が引いて場は収まったらしい。
そして俺は翌朝まで保健室でのびてた。

―廊下―

目が覚めた俺は一応教室へ向かう、だって朝だし、荷物置きっぱなしだし。

そんな寝起きの俺の前に謎の人類が現れた。

「なんだよ？」
「えっ、いや、なんでもないです」
「ウソつけ、何か言いたい事あんだろ？」

まぁ言いたい事はありますよ。
でもそれは言っていい事なのかを迷ってるんですねよね～

「おいしいんですか？」
「ウマイよ、食う？」

とタバコを一本俺に差し出す謎の人類。
しかし、この差し出したタバコを吸えという意図で出されたものではない、
文字通り、食べる。という意図で出されたものだ。
なんたって目の前にいるこの人はタバコをおいしそうに食っている

のだから。
だが、俺は風紀委員なのでそこら辺の事情も踏まえて言葉を選ぶ。
「いや、いらないですよ。っていうかタバコって食べ物じゃないでしょ」
「俺はコレ食わなきゃ能力が使えないんだよ」
「そうだとしても、風紀委員としては見逃せません」
シュッ
！　右腕に何か掠めた？
俺の右腕の制服は刃がかすめたかのように破れ、少し血が流れる。
「敵対行為とみなしますよ？」
「構わない、風紀委員は大嫌いなんだ」
五月雨抜刀。
「刀か、稜姫に似てるな。だが」
スーーッ
謎の人類は息を大きく吸う。
ふん、隙だらけだ。
俺は謎の人類に斬り掛かろうと五月雨を振るう。
しかし、

ハーーッ
と謎の人類が息を吐くと、全身が切り刻まれたかのように切り傷が出来る。
俺は咄嗟に眼前に五月雨の刀身を構える。
目だけは守らないとな。
「何をしたんだ？」
「攻撃しただけさ、安心しろ動脈は狙ってねぇーから」
服はボロボロになり、傷口からは鮮血が流れ出ている。
「お前、一年だろ？」
「そうだけど、それがどうした」
「じゃあ知らねぇーよな。俺がなんて呼ばれてるのか」
「？」
「俺は風間（かざま）　俊介（しゅんすけ）たいていの人間は『不幸の風』って呼ぶんだ」
「不幸の…風？」
「あぁ、俺の吐く息を浴びたら不幸になるからな」
「今の俺みたいにか」
「正解。話は変わるけど、その刀誰から貰った？」
「稜姫先輩から」
「へぇ〜　あの『斬り裂き姫』が五月雨を他人にねぇ」
不思議そうな顔で俺の握る五月雨を見ている。
「よし、せっかく五月雨が他人の手にあるんだ。手に入れるなら今

だな」
不幸の風はそう言うと再び息を俺に向かってはいた。
シュシュシュシュシュ！
再び俺の体を襲う痛み、
このままじゃ出血多量で死ぬんじゃないか？
ヤバ。
俺は目を瞑ったまま五月雨を振り回しながら前へ進む
「そんなんじゃ当たんないぜ」
「喋ってる時は攻撃できないだろ」
目を見開き俺は脚に力を込めて解き放つ、残像を残しながら移動する俺を不幸の風は捉えることはできず、
背後に着いた俺は五月雨を振り落とした。
振り落としたはずなのに、血は一滴たりとも流れはしなかった。
それ以前に不幸の風が真っ二つになった！？
「俺は少し特殊でね。能力が二つあるんだ。二つとも神経強化系だけどな」
「幻覚！？」
「少し違うな。さてと、終わらせるか」
「後ろか！」
「気づくのが遅いよ」
初めて見えた。

不幸の風の見えない刃、
そうかタバコの草が、半端ないスピードで。
間に合わない、殺られる……っ！
刹那、炎が俺を包んだ。

「なんだ？」
「まったく、ホント私が居ないと秋人はダメだな」
その声は普段から聞き覚えのある声、
いつも一緒にいた声、
「烈か！？」
炎が消えると烈が後ろに立っていた。
「ありがとう、たすかっ」
言葉は途中で遮られ、俺は頬に痛みを感じながら宙を舞っていた。
あれ、なんで俺飛んでんだろう？
あれ、なんで烈が俺を殴ってんだろう？
あれ、助けに来たんじゃないの？
あれェェ！？
そして床に叩きつけられた俺は起き上がると、
「何すんだよ！」

と怒声を上げる。

「何すんだよじゃねぇーよ、私以外の人間に虐げられるな！」

えっ、怒ってるのソコ？

それだけの理由、ってか自分のおもちゃを盗られた子供ですか貴女は。

「なぁ烈、俺を助けに来たんじゃないのか？」

「何言ってんの、秋人を奪い返しに来たのよ」

あー　あくまで俺は「物」なんですね。はい、分かりました。

「ところで、アンタは私の物に何か用でもあるのかしら？」

「発火能力（パイロイネシス）か、それほどの炎を出せるのは中々レアだぞ？」

「へぇ～　それよりも火貸してほしかったらいつでも言いなさい、アンタごと灰にして上げるから」

と口から火を吐き出しながら言う烈。

ドSに火って、鬼に金棒じゃないか。

色んな意味でヤバい組み合わせだよ。

「それに、一番気に食わないのは秋人に怪我させたことよ」

黒い笑みは消え、正真正銘の怒りの炎を烈は燃やしていた。

ホント、俺っていつも守ってばっかだな、こいつに。

「おいおい、相性悪すぎ。ここは一先ず引かせて貰う」

そう言い残して不幸の風は息を吐き出し、烈は炎を噴き出して対抗する。
炎が消えると、そこに不幸の風の姿はなく、残ったのは焦げた匂いと、黒く変色した床と壁と天井だった。
「これって、だれが修理するんだよ」

08　タバコは大人になってからだよね。（後書き）

対決（バトら）せてみたんですけど、上手く書けませんでした（泣）
あと、やっぱ技名とかあった方がいいですかね？

09　結果は準備の質次第だと思う。

不幸の風とのいざこざの後、稜姫（いつき）先輩から雷を落とされ、
委員長からは校内で破壊行為はしないように、と釘を刺され、
教職員方や用務員さん達にも頭を下げて回った。
もちろん烈が他人に頭を下げてストレスが溜まらぬわけもなく、
俺に矛先が向けられ、吊し上げにされた挙句火で炙られた。
このあと地獄の様な責めがあったのだが、それはちょっと話したくないのでスルーという事で。

―1年校舎・風紀委員事務室―

今俺と烈は一年校舎に新設された風紀委員事務室で荷物の整理をしている。

「少し掃除しないか？」
「なんでそんなめんどくさい事するの？」
「なんでって、こんなにホコってたら普通掃除から始めるだろ！」

新設。と言っても部屋が造られたわけではなく、前々からあった部屋を当てられた。
去年まで使っていた風紀委員事務室は教室として、今の一年G組が使用している。
で、風紀委員会が急ごしらえで用意したのが元物置き部屋ってわけだ。
その部屋に烈は掃除もせずに少し荷物を持ち込んだのだ。

「でもさ～　私は掃除とかはちょっと」

「女の子だろ？　掃除とかは将来必須の技能だぞ」
「大丈夫。相手がしてくれる」
「してくれる。じゃなくて、させる。の間違いだろ」
「別いいじゃんか、それよか窓開けて扇風機でも回してホコリ飛ばそう」
「何言ってんだ。雑巾とかホウキとかで集めるんだよ」

と俺はホウキを投げ渡す。
烈はため息交じりにホウキで床を掃き始める。
どうも乗り気じゃないらしい。

それから数十分後……。

掃除は思いのほかスムーズに進み、清潔感ある部屋へ生まれ変わった。

「あ～　終わった～」
「烈、まだ荷物の整理が終わってないだろ」
「も～　いや！　あと秋人に任せた」
「はぁ～！」

烈は先に運び込んでいたソファーに横になる。
身体を揺すってみても「グゥ～　グゥ～」と私は寝てますよ～　とアピールが返ってくる。
これはもうだめだ。と俺は確信して、一人で運ぶには大変苦労するデスク用の机、少し高そうな椅子、冷蔵庫、エアコン、さらに来客・相談用の机と椅子に本棚と、多種多様な品を俺は一人で日が落ちるまで部屋に運び込んで配置していた。

一通り済んだ所で俺はデスクにつく、自分の名前が書かれた自分の

デスク。
なんか少し偉くなった気分だ。
こんな椅子に座るのも始めた出し、なんか、幸せかも。
背もたれにもたれながら俺は睡魔に襲われ、意識は徐々に薄れていった。

０９　結果は準備の質次第だと思う。（後書き）

今話は閑話です。短いですが、読んで頂いてありがとうございます。
次話では技名的な物を出したいと思っています。

１０　やっぱ必殺技とかっているよね。

翌朝、俺の目を覚ましたのは窓から差し込んできた朝陽でも、癒される小鳥たちの鳴き声でもなく、幼馴染の鉄拳だった。

「いたいな～　何すんだよ」

「朝だぞ！？」

「だからどうしたんだよ」

と何時か確認しようと時計を見てみると、なぜか長針も短針も１２を指していた。

「朝じゃなくて昼じゃないかー！」

「だから早く起きろって言ったんだよ！　どうすんだよ私達遅刻だぞ」

「いや、もう遅刻って話じゃないだろ。サボちゃったって方が正しいなこの時間帯だと」

どうしたものかと俺と烈は腕を組んで考える。

だがしかし寝起きの俺に妙案が浮かぶとも思えず、あとは烈頼みだ。

「そうだ！」

烈が何か閃いたのか声を上げる。

俺はどんな事を思いついたのか胸躍らせる。

「何かいい案でもあるのか？」

「このまま病欠という事にしておこう。大丈夫、私達はなりたての風紀委員だ。身体を壊したとか言っておけば誤魔化せる」

「まぁ、それもそうだし。サボるか」

そう、実を言うと俺はそんなに真面目じゃない。
中学の時も時々サボる事はあったんだ。
それに烈の提案は俺的に言うと百点満点だ。

そんなサボる方向性で自分の意思を調整していると、戸が開いた。

「誰ですか？　まだ授業中でっ……稜姫（いつき）先輩」
「何をしているんだ？」
「いや、その。荷物の整理を」
「烈！　貴様にも聞いているんだぞ？」
「わ、私は相棒の手伝いを」

稜姫先輩は鋭い眼差しで俺たちを見ている。
疑っている。疑われてる！

「まぁいいだろう、それより不幸の風と一戦交えたそうだな」
「あー　昨日の」
「そうだ。昨日の事を聞いているんだ」
「私は途中からだから詳しくは分かんないけど、秋人なら」

くっ、俺一人に押し付ける気か！？

「秋人、詳しく話せ」
「……喧嘩売られました」
「……なるほど。勝ちたいか？」
「そりゃ、まー」

先輩は俺が負けたことをお見通しだった。

いや、きっと俺なんかが勝てるはずがないと確信していたんだな。

「ウジウジせず、きっぱりと決めんか！」
「は、はい。勝ちたいです！」
「よし、烈には少し教えたと思うがお前にも教えよう」
「何をですか？」
「必殺技みたいなもんよ。ねっ先輩？」
「あぁ、そんなものだ」

着いて来い。と先輩は手招きをして事務室を後にする。

―森林エリア―

「結構歩いたんですけど、まだ着かないんですか？」
「もう着いた」

少し進むと開けた場所に出た。
軽くサッカーコート二面はありそうな広さだ。

「それにしても烈、いつの間にここで特訓したんだよ？」
「私はここに来るのは始めて、この前は能力を使うコツを教えて貰っただけ」
「コツ？」
「そうだ。能力を思い通りに使いたいなら”イメージ”が重要だ。それ一つで質が変わる」
「イメージ。ですか」
「そうだ。烈、やってみろ」
「は～い」

烈は返事をすると、右手を前へかざし

「炎弾！」

と声を上げると、手の平から炎の弾丸が前方に射出された。

「うぁー　なんか羨ましい…」

「凄いでしょ～？　私は神経強化系だからね」

「烈と違ってお前は肉体強化系だろうから、イメージといっても技の動作をイメージしろよ」

「はい」

烈は炎を操れるのがよっぽど嬉しいのか、満点の笑み火の玉でお手玉していた。

この時ばかりは、やっぱり女の子何だよな～　と思わずにはいられなかった俺である。

しかし困った。

技の動作のイメージと言っても俺は今まで剣道というものを全くやった事がないし、子供の頃はあまりアニメをみていないので、想像という観点では自力でイメージを作り上げるのは不可能だ。

そんな困り果てた俺に見兼ねた稜姫先輩は、

「私の流派でよければ手本を見せようか？」

と、手を差し伸べてくれた。

もちろん俺の答えは

「お願いします！」

「私の流派は華天流（かてんりゅう）といってな、私はその中では『演武』（えんぶ）という派閥に入っている。まぁ細かい事は置いておいて、私が適当にうつからうけてみろ」
「分かりました」

先輩は柄に手を伸ばし、構える。
すると、辺りの空気は緊張を高め冷や汗が出てきた。

「華天流演武　一つ目『蓮華』！」

抜刀と同時に俺に向かって駆けてくる！
しかも突きですか！
どう避ければいいんだよ！？

先輩の突きは早すぎて刀身が分裂して見える。
そんな神速ともいえる突きを俺が完全に凌げるわけもなく、制服はどんどんリサイクルへの道を進んでいる。

「ちょ、先輩！　もういいですって、このままじゃ俺死んじゃいますって！」
「そうか？」

きょとん、した顔で先輩は嵐の様な突きを止めた。
この人も加減ってものが分からん部類なのか？

「しかしこの程度とは情けない、これではせっかく用意した実戦もできそうにないな」

と視線の方を見てみると、いかにも不良という格好をした生徒が四

人立っていた。

「もしかし俺たちをあの人たちと戦わせるつもりだったんですか？」

「よく分かったな。その通りだ」

良かった～

ホント良かった～

「心配無いですよ。秋人は本番に強いですから」

「そうか、なら本番といってみるか」

烈ゥゥ～！

なんて事言ってくれんだよ！

って、おい。まさかお前ワザとか！

烈は笑っていた。

黒く。

「秋人、楽しみましょう♪」

「……こいつ、本当に悪魔だな」

「秋人、お前はまず見ていろ。烈との差を見て貰う」

「烈との差、ですか？」

「あぁ。あの子は意外と優秀だからな」

「優秀。ね」

烈は不良二人と対峙する。

「アンタ達も運が悪いわねぇ～　私と相手をさせられるなんて」

「ふん、ガキ一人負かすくらいで見逃してもらえるってんだからチ

ョロイもんだろ？」
「そうだぜ。それに後でお前を可愛がってやるよ。なかなかの上玉だからな」
台詞までホント不良だな。
少しベタすぎる気もするけど。
「勝てるんならねッ！」
烈は炎を無差別に周囲に放つ。
「おっと」
「可愛い顔してやることは大胆だねぇ～」
「さてと、次は秋人が待ってるんでね。もう終わらすわよ」
烈は空中に跳んで避けた二人に向かって終了を宣言した。
まだ滞空時間の為、身動きが制限されている二人は少し警戒を強め、胸の前で腕をクロスして身構える。
「そんな生身で防げるわけないでしょ」
烈は両手を横に命一杯広げ炎の塊を両手に創り出した。
「『炎帝召弾』（えんていしょうだん）ッ！」
言葉と共に両手を前に向けると、この世の法則なんて無視した巨大な炎が不良二人に向けて放たれた。
そして俺は前言を修正せねばなるまい。

終了宣言ではなかった、死刑宣言だったのだ。

不良二名はというと、真黒に焦げながらも烈の加減のお陰で一命はとり遂げることができた。
しかし烈はあの不良二名にとってはトラウマ確定だな、もしかしたら転校するかもな。

「これが私の実力よ」

と烈は胸を張って言う、確かにこれは俺も一言もケチをつける事が出来ない。

「あきれるほどに凄いな」
「何をボサッとしてる？　次はお前の番だぞ」

あっ、すっかり忘れてた。
俺も戦うんだったっけ、どうしよう。

１０　やっぱ必殺技とかっているよね。（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
この修行？が終わったらチョメチョメ編的なものを始めたいと思います。

１１　やればできる子は案外自分かもしれない。

今現在、俺は不良二名と対峙している。
なんで俺はいっつも苦労する事になるんだろう、自分でも本当に不思議でたまらない。

「さっきの女はさすがにビビったけどよぉ」
「お前はどうやら俺らと同類だな」

同類？
おいおいおい、冗談じゃない。
俺は不良じゃないし、お前らみたく腐ってねぇーよ。

まぁ今思ってる事が口に出せたら、俺も烈の様になれるんだろうけど。

「さて、コイツを倒したら見逃してくれるんだよな～！」

と少し離れた所で見守っている稜姫先輩に、不良の一人が質問する。

「あぁ、その通りだ！」

「だとよぉ～」
「あはははは。ほんと俺らはついてるぜ」

二人は戦闘態勢に入る。

そして俺の脳裏には先程言われた先輩の言葉が思いかえされる。

『いいか、華天流演武に入ったのだから…』
『あのー　いつ入ったんですか？』
『お前に見せた時だ』
『断る事は出来ない……ですね』
『いいか。刀を抜き、戦うのであればこう言え』

「北条　秋人、推して参る！」

抜刀。と同時に俺は二人めがけて脚力全開で突進、先輩曰く、先手必勝だそうだから、
そんな思考を愚かにも戦闘中にする俺はこんな事も思っていた。

あー　きっとすぐ反応されてジワジワ長期戦かな～

と、まだ始まって数秒という時間であきらめモードに入る俺である、我ながら情けないと思う。
しかし、俺の思考とは裏腹に俺が不良一人の背後に移動しても気付いた様子が無かった。

あれ？　もしかして気付いてないのか？
チャンスだよな。

俺は烈の様に大胆に相手を攻撃する事に躊躇いがあるので、刃で斬るという行為にいたれない。
だから、峰を打ち込む。

ドガッ。

「ぐはっ！」

不良一名、脱落。

「くそ、いつの間に後ろに。オラァァァァ！」

パンチの嵐、でも稜姫先輩の突きに比べたら止まって見える。
一発、一発を確実に避け、俺はあっという間に懐に潜り込んだ。

「ラスト！」

俺の勝利宣言だった。
柄の先で鳩尾に一突き、完全に決まった。
不良は白目を剥いて地面に倒れ込む。

そして稜姫先輩は、パチパチパチと拍手しながら俺の傍まで来た。

「私の思った通りの結果だ」
「秋人にしては中々良かったわよ」
「どうも」

稜姫先輩は上機嫌、烈はまださっきの戦闘の興奮が冷めないのか少しテーションが高い。
で、俺は気絶させた不良に目を向ける。

「まさか同情なんてしているんじゃないんだろうな？」
「えっ、そ、そんな事ないですよ」
「こいつらは校則（ルール）を破ったんだ。法を犯したも同然の輩たちだ。だから哀れむ必要はない」

きっぱりと、揺るぎなく、絶対の自信を持って稜姫先輩は言ったの

だろう。
言葉の重みを始めて味わった気がするから。

「さてと、校舎に戻ったら私が何か奢ってやろう」
「いいんですか？」
「あぁ、何でも好きな物を言ってくれて構わない」
「やっほー！　さすが先輩、太っ腹ですね～♪」
「おい烈、先輩なんだからもっと遠慮というものをだな」
「遠慮なんて要りませんよね？」
「もちろん。今回は私が付き合わせたんだ、礼だと思ってくれ」
「そうですか」

内心俺は嬉しかった。
初めて褒めて貰った気分だ。
それに今気付いたんだけど、俺の両隣にいる二人。
めちゃくちゃ綺麗で可愛いんだよな、はぁ～　彼女欲しいかも。

じゃじゃじゃじゃーん！　じゃじゃじゃじゃーん！

そんな音を発している携帯を稜姫先輩はポケットから取り出した。
ベートヴェンの『運命』が着メロ！？
相手どんな人なんだよ。

「委員長、どうしたんですか？」

委員長、もしかして嫌われてる？
でも、まさかね。

「えっ、はい。すぐに向かいます！　二人とも急いで戻るぞ！」

いきなりの事にポカーンとしている俺と烈に、早くしろ！　と声を浴びせる。
俺達は動揺しながらも校舎へ向けて走り出した。

１１　やればできる子は案外自分かもしれない。（後書き）

なんか秋人の戦い早く終わっちゃいました（笑）
次話から　ＶＳ生徒会編です。
あと、感想などありましたらどうぞ。

１２　他人の喧嘩は放っておいた方がいい。（前書き）

今話から、ＶＳ生徒会編です。

１２　他人の喧嘩は放っておいた方がいい。

―風紀委員幹部専用会議室―

「お。やっときたか、稜姫早く座れ」

「はい」

珍しく委員長が喋ってる！？

そんなに大変な事が起きてるのか？

それになんで委員長しか座ってないんだろう。

「委員長、他のメンバーは？」

「皆出払っている。事は一刻を争うからな」

「一体何があったんですか」

俺も席に着く。

すると烈が耳元で「私はどうすればいいんだ？」と珍しく空気を読んで小声で聞いてくる、

俺は「立ってるしかないだろう」と答えを返したら、烈の額に青筋が浮かぶのが見えた。

どうやら俺の返事は烈を怒らせる物だったようだ。

だが、場の空気を読んでいる烈は怒りを忘却の彼方へと追いやったのか、溜息一つ吐いて耳元から離れた。

「それが、あの、妹（バカ）が」

委員長の声は怒りで震えていた。

俺はゴクリと唾を飲み込む。

「風紀（ウチ）委員会の予算を全面凍結するって言いだしたんだ！」

「！　まさか…」

稜姫先輩は驚愕の表情を浮かべる。

「今年度の予算はつい先週申請したばかりですよ？　まだ予算会議も行われていないのに」

「そうなんだよ。どうも先日の喧嘩が気に食わなかったらしくてね」

「しかし、本当に予算が下りなかったら風紀委員会始まって以来の危機ですよ」

「そうなんだ。だから他の者たちには回避すべく生徒会メンバーに奇襲をかけるように命令したところだ」

「では、やるのですか？　アレを」

「まぁ、そうなる」

稜姫先輩と委員長は重苦しい表情で話している。

ここで事情を理解していないと後で苦労するのは目に見えているな、聞くか。

「あのー　話が見えてこないんですが」

「そう言えば、君にはまだ説明してなかったね。悪いが稜姫、後は頼む。やることがあるんでな」

「分かりました」

委員長は稜姫先輩に頼んで退室した。

「では、詳しく話そう。

風紀委員会は校内の警察機関みたいなものだ。故に経費という物が掛る。それに各人に少ないが給料も渡しているんだ。

給料目当てで入っている奴もいるしな。それに設備を維持するのにも金は掛かる。風紀委員会は金で機能していると言っても間違いじゃないんだ」
「ということは、その金がなくなったら委員会は空中分解。ってとこですか」
「まぁ、そうだな」
「じゃあ……」
「そうだ。今は空中分解の真っただ中にいる。それを防ぐには会長に折れて貰うしかない」
「だから生徒会のメンバーを奇襲してるんですか」
「分かったなら我々も行くぞ」
「行くって、どこにですか？」
「勿論奇襲をしにだ」

なんでそんな冷静な顔でそんな大胆な事言えるんですか！？
奇襲って、完全に俺ら悪者ですよ？　悪ですよ？　校内の風紀を守る立場にいるのに。

「先輩、全力で行きましょう♪」
「おう」

あぁ、なんか最強タッグが出来あがっちゃってるんだけど。
これ、死人出るんじゃないの？

「何してんの、秋人も行くわよ」
「あ、あぁ……不安だな～」

―渡り廊下―

「二年校舎に行くんですか？」
「当たり前だ。三年校舎にはすでに八人散っている」
「って事は二年校舎には私らも含めて五人ですか」
「ちょっと待てよ。風紀委員会ってもっと人数居ましたよね？」
「あぁ、いる事に入るが。生徒会役委員とは雲泥の実力差があるから今回は引っ込んでいるだろう」

新入りの俺達が出しゃばっていいのだろうか？
あとで何かされそうで怖い、特に俺。

そんなお先真っ暗な俺の前に巫女装束の女子生徒が一人、奈々副会長だった。
いきなりババ来たー！
引きたくなかったのに～

「あら、稜姫ちゃんに…」

奈々副会長が話しているというに稜姫先輩は容赦なく斬りかかる。

「いきなり…ですか、容赦ないですね～」

奈々副会長は短剣で先輩の一太刀を受けとめる。
なんて反応スピード、これがこの学園を統べる生徒会副会長の実力か。
感心している俺の横を何か通り過ぎる。

「私もいるのよー！」
「おい、烈！？」

烈は両手に炎の塊を浮かせて、奈々副会長に攻撃を仕掛けようとジ

ャンプ。
しかし奈々副会長の陰から何か出てきて、烈を弾き飛ばす。
「誰！」
烈は声を上げる。
よく見ると奈々副会長の隣に男子生徒が一人立っていた。
「生徒会　副会長補佐、藤堂（とうどう）　秀司（しゅうじ）」
俺とあまり背丈が変わらない、茶髪の二年生はそう名乗った。
それにしてもかなりテーションが低いな、本当にやる気があるのか疑ってしまったぞ。

「おい、烈。いきなり襲いかかるなんて」
「何言ってんだよ、奇襲の意味ないじゃん」
「だがな、常識というものがだな」
「稜姫先輩が一番よ？」
「うっ、先輩！」
「お前らはそいつの相手をしろ！」
そう言って三階に架かっている渡り廊下から稜姫先輩と奈々副会長は飛び降りる。
「さて、我々だけになりましたね。私はあなた方と戦闘する意思はありませんが、どうでしょうか？」
「俺は……」
「もちろん！　私達はやる気満々よ！」

と問答無用で前へ出た。
今度は口から炎を吐いてけん制する。
「そうですか、非常に残念です。では、私も本気で参ります」
そう言って両手を広げると、左右から水が彼の両手の上で球体上に集まっていく。
「私と似たもんか？」
「いえ、私は水を発生させるなんて高度な事はできません」
「じゃあ、どうやって……そうかここは中庭に跨る渡り廊下！　中庭には噴水が」
「その通りですよ。彼女に比べて貴方は冷静で物わかりが良さそうですね」
褒めてくれれるのはありがたいが、俺は生憎ただ臆病者なんだけど。
それに烈をバカにしたら、
「私が…バカだって言いたいのかァァァ！」
怒号を上げて烈は燃え上がる。
そう、文字通り全身に炎を纏って、見ているこっちは火達磨になった人間にしか見えない。
「水、掛けた方がいいかな」
俺は本心を零す。
「やれやれ、女性に手を上げるのは私のポリシーに反するのですが、身にかかる火の粉は払わなければね？」

プッチン。

そう俺には聞こえた気がする。

「私が、火の粉？　火の粉って。ふざけんなよォォォ！」

炎を身に纏う烈から竜巻の様な炎が二本彼に迫る。が、彼の前に瞬時に水の壁が出来上がり炎は鎮火した。

「炎では水に勝てませんよ？」

「ふふふふ、あはははは！　面白い、面白いわ！　蒸発させたげるわよ！」

キレやがった。

「『炎帝召弾』！」

なっ！　これってあの不良達に放った奴の倍近くあるじゃねぇーか！

「ふん、水神壁玉（すいじんへきぎょく）」

水が円形状に変化して烈の技を迎え撃つ、途端に水蒸気が辺りを包み込み、視界に影響を与えた。

クソっ、これじゃ見えない。

「燃えろォォォ！」

烈か？

炎が渦を巻いて火柱が立つ、その勢いで水蒸気は吹き飛び火柱の中に烈がいることを確認できた。

こんな狭いとこで火柱なんか立てやがって、離れてる俺のとこまで熱気が来てるよ。

「全く。これでは校舎に甚大な被害が出てしまいますね。仕方ない、決めますよ」

彼は愚痴を零しながら烈に向けて駆ける。

「『絶対零度』」

それは一瞬だった。

火柱が凍った。

中にいる烈は無反応、死んではいないと思うが。

「さて、残るは貴方だけですが、どうしますか？」

「そりゃー　俺は戦うのはゴメンだね」

「そうですか、では私はこれでし…」

「だけど」

俺は言葉を遮って、睨みつけながら言う。

「幼馴染にこんな事されて、ただじゃ帰さねぇーよ」

「貴方は簡単には帰させてくれそうにありませんね」

「北条　秋人、推して参る……っ！」

抜刀、しかし刹那信じられない事が起こった。

「ここですよ？」

声が、後ろからしたのだ。

振り返るとすでに水を剣の形で固定して振り下ろしている時だった。

袈裟に斬られた。

服は破れ、血は流れ、俺は淵に立った。

「信じられませんか？」

「いや、疑う余地はない。俺は斬られたんだから」

「良い心掛けです。しかし対処法を考えないといけませんよ？」

「考えるけど、その前にアンタをぶん殴る！」

俺は全身の力を抜いて、改めて五月雨を構える。

集中…感覚を研ぎ澄ませ、俺！

「参る！」

限られた空間だが、俺は脚力を出し惜しみなしで使って、瞬時に背後に回り込む。

決める。

刃を振り落とす、が刃はコンクリートに当たった。

移動も速いな、これが生徒会の実力か。

パキッ、パキッ。

その音に俺も彼も、戦闘中だというのに一点に視線をやる。
視線の先は凍った火柱だ。

「まさか、私の氷が溶かされるとは」

凍った火柱は四方八方に砕け散り、氷は溶け水に変わって数秒間渡り廊下のみに雨が降った。

「私抜きで楽しい事してるじゃない、秋人」

烈が再びリングに上がった瞬間だった。

１２　他人の喧嘩は放っておいた方がいい。（後書き）

ＶＳ生徒会編　第一話。どうでしたか？
感想などありましたら、どうぞ。

１３　炎は消してもまた自然と燃え上がる。（前書き）

ＶＳ生徒会編　第二話です。
感想などありましたら、どうぞ。

13　炎は消してもまた自然と燃え上がる。

「烈、無事だったのか」
「当たり前でしょ、私を誰だと思ってるの？」
「心配するだけ無駄だった。って事か」

心底心配したのに、もう少し反応が可愛らしかったらな。

ともあれこれで二対一、実力はアチラが上だろうが俺も烈もそこそこ強いはずなので協力すれば、何とかなるかな。と思考を働かせる。

「やれやれ、風紀委員会の新人は毎年化け物がいますね」
「私は化け物じゃない、女王様だ！」

喰らえ。と炎弾を一発放つ。
しかし水を纏わせて手で弾き飛ばす。

「少しは学習したらどうで…」

そう言いかけた時、彼の視界には俺が斬りかかる瞬間が飛び込んできただろう。
炎弾は囮、本命は物理的な直接攻撃。
つまりは五月雨による斬撃だ。

「クッ」

瞬時に眼前へ水を集結させ、五月雨を少し足止めする。
僅かにできた回避チャンスを彼は十二分に生かし、反撃へと出た。
まるで地面を這う蛇の如き動きで、刹那に俺の腹へ重い一発を撃ち

込む。

「がはっ！？」

まさか、この一瞬でここまでの事を…

一歩、二歩後ずさる俺、しかし弱っている俺を見逃すはずもなく止めを仕掛けに動く、両手に西洋の槍に似せて水を纏い、地面を一蹴りして槍を構え突進してきた。

ヤバイぞ！
動け体！
まだ死にたくないだろう！

しかし思った以上にダメージが大きく、体はまだひるんだままだった。

「炎幕（えんまく）！」

やられる。と覚悟した時、烈の声と同時に俺を炎の幕が覆う。
そして彼の槍が炎幕に触れると同時に槍は蒸発していき、それを見るや否や彼は後ろに跳躍した。

「やれやれ、本当に手のかかる相手ですね」

俺を覆う炎の幕は燃え尽きて俺は再び彼を視界に捉える。

「それはどうも、先輩も手強いですよ」
「お褒めの言葉ありがとう、しかし困りました。このままでは生徒会の職務に支障が出てしまいます」

「それがどうしたよ！　アンタだって私達と戦リ合えて楽しいだろ～？」
「まぁ確かに面白いですけど、職務には忠実に。というのが私のモットーですので、提案です。ここは痛み分けという事で互いに引きませんか？」
「痛み分け？　それほど怪我は互いにしてないと思うんですけど？」
「お互い上司に色々と言われるでしょう？」
「あー　なるほど。それで痛み分けか、でも俺達は怒られるのは御免ですね」
「そうですか、では致し方ありません。逃げます♪」
「「はぁ？」」

次の瞬間、渡り廊下を球体上に水が覆う。

ブクブクブク～
ガバガバガバ～

（烈～　何とかしろよ！）
（あ～　無理かも）
（イメージしろ、イメージ！）
（え～っと、あぁこれでどうだ！　炎海地獄（えんかいじごく）！）

烈から莫大な量の炎が噴き出して、水をあっという間に蒸発させた。が、飛び火した。

「熱ィ～！　アツ、アツ、ちょ、これ何とかしろよ～！？」
「あー　消えろ、消えろ！」

烈が念じるようにそう言うと、炎の勢いは徐々に衰えて数秒後には鎮火した。

「焼け死ぬかと思った」
「ぷっ」
「ん？　今笑ったろ」
「いや、別に～」
「わ！　ら！　った！　ろ！」
「はいはいはい。笑いましたよ、それが何か？」

そんな言い合いをしていると俺達は気付いた。

（（あ、逃がしちゃったよ））

びしょ濡れで床に胡坐をかいて俺は稜姫先輩になんて言い訳をしようかと考えていると、

「どうも、こんちわ。そしてさようなら」

と銃を構えた黒い長髪の少年がいつの間にか立っていた。

１３　炎は消してもまた自然と燃え上がる。（後書き）

最後まで読んで頂いてありがとうございます。

１４　上には上がいるもんだ。（前書き）

ＶＳ生徒会編　第三話です。
感想などありましたら、どうぞ。

１４　上には上がいるもんだ。

「どうも、こんちわ。そしてさようなら」

と銃を構えた黒い長髪の少年がいつの間にか立っていた。

ヤバイ、こいつはヤバい……ッ！

俺の本能は今視界に入っている人間に対しては全身全霊を持ち、一瞬の油断もしてはならないと警鐘を鳴らす。

黒髪の少年は引き金を何の躊躇もなく引いた。

が、銃口の中には銃弾は装填されていなかった。

代わりに。

ドーンッ。

銃声はしたが、銃弾は射出しなかった。

しかい、確かに俺の腹からは血がにじみ出ていた。

グハッ。

止め無く溢れる血、あっという間に血の水たまりができてしまった。

「なっ、秋人！」

烈が駆け寄ってくる。

今まで見せたこともない表情で、なんで涙なんか流してるんだろうか、その疑問を最後に俺は意識を手放した。

―保健室―

目を覚ますと消毒液の匂い、そして真っ白の天井。
一瞬でここがどこだか分った。
保健室だ。

「あら、目が覚めたの？」

上体を起こして、声の主を視界に入れる。
彼女は二十代前半だろうか、かなり若い。
それに白衣なのに何故か黒タイツにミニスカ……。

「保険の先生…ですか？」
「そうよ。一年校舎保健室勤務の先生、七瀬（ななせ）　香織（かおり）って言うの、よろしくね」
「よろしくお願いします…あと、もう一人いませんでしたか？」

俺は聞きたかった。
俺はやられてしまったけど、烈は無事だったのかどうかを。

「大丈夫よ、烈ちゃんなら今頃稜姫ちゃんからキツーイお話を受けてる頃だろうから」
「そう、ですか」
「にしても君も災難ね～　一年なのに副会長にやられて」
「えっ？　副会長って奈々さんなんじゃ」
「御南（ウチ）茂学園の生徒会には副会長が二人いるのよ。男女一人ずつね」
「なるほど」

「君が遭ったのは黒井（くろい）蒼（あお）君。生徒会の？2よ」
「？2、奈々副会長よりも強いんですか…」
「そう、才能の塊ね。でも会長ちゃんには手も足も出なかったけど」
と、少し艶美な笑みを見せる。
「失礼する」
そう言って稜姫先輩と烈がやって来た。
「なんだ。もう目が覚めたのか」
稜姫先輩はいつも通り凛としているんだけど、烈はどうしたんだろうか？
酷くテーションが低い、まるでこの世の終わりでも見たかの様な、そんな顔だ。
「それにしても、稜姫ちゃん。新人を置いてきぼりなんて、少し酷いんじゃないの？」
「うっ……それは、しかしあの状況では」
「はいはい。言い訳なら幾らでも言えるわよね～」
「ううっ……」
稜姫先輩が押されてる！？
しかも初めて見たよ、涙。
なんか…可愛い。
そして七瀬先生は親指で俺を指し、「謝りなさい」と稜姫先輩に告げる。
稜姫先輩は最初こそ躊躇って一歩を踏み出さなかったが、「早く」

という先生の催促を受けてベッドの横まで来た。

「悪かった」

きっとそれが先輩の精一杯だったんだ。
俺は恐れ多いので、「いえいえいえ」とビビりながら言う。
しかし、ここで「そんなんじゃないでしょ？」と先生は先輩にやり直しを求める。いや、命令した。という方が正しいだろう。「ご、ご…ごめんなさ」涙目で言われたそれは普段とのギャップも相俟って、核兵器級の破壊力だった。
きっと、これで落ちない男はこの世に存在しないだろう。
そう確信を持てる。

「……姉さん！　私はやはり貴女が嫌いだ！」

……姉さん？　誰それ。

「あら、稜姫ちゃん。お姉ちゃん傷ついちゃうな～」
「あのー　もしかしてお二人は姉妹で？」
「そうよ♪」
「でも、苗字が…」

俺の質問に先生は左手を俺に見せる。
左手のに輝く指輪、しかもデカイダイヤモンドが眩しい。

「あぁ、結婚されてたんですか」

苗字が違う訳だ。
そりゃー　こんな美人なんだから男が放っておく訳ないか。
納得だわ。

「オホン」

先輩は一回咳払いをして

「さて、秋人。怪我も治った事だし、続きをやるぞ！」

「続きて、何の続きをですか？」

「何を言っている。予算争奪戦だ」

「初耳なんですけど」

「そうだったか？」

その後、俺は予算争奪戦とやらの説明を稜姫先輩から受けた。

委員会、部活が生徒会に申請した予算が却下などされた時に、不服と思ったら生徒会相手に即戦闘が起きるんだそうで、（ちなみに戦闘＝嘆願だそうです）特にこの時季が一番激しいらしい。

しかもだ。四年前は四人も重傷者が出て今も病院の御世話になるほど激しい展開になる事もあるそうな。

「何もかも初耳なんですけど先輩」

「あー　すまん。そう言えば詳しくは話していなかったな」

「でもまぁ、予算が通らないってのは大変な事だし、俺は別に協力しますけど…烈に何があったんですか？」

「あぁ、少し説教をな。心配する事はない」

パチン。

と指で鳴らすと、「あれ、私何やってたんだっけ？」と烈が覚醒した。

「何したんですか？」
「だから説教だ。少し特殊だが」

こえぇー！
この人『真正の女王』を上回ったよ！？
まさか女神か、女神様なのか！
……その女神様を涙目にさせた先生って、人？

「秋人、烈、今から生徒会準備室に殴りこみに行くぞ。標的は書記の春原（はるばら）　楓（かえで）だ」
「は、はい」
「オッケー♪」

こうして、俺はやられたばかりなのに前線復帰することになった。

１５　本が沢山貯蔵されている場所ではお静かに。（前書き）

ＶＳ生徒会編　四話です。
感想などありましたら、どうぞ。

15　本が沢山貯蔵されている場所ではお静かに。

―生徒会準備室―

呼吸は乱れ、空気は凍てつき、床は鮮血に染まり、
足は震え、意識は揺れる。

今、俺の前には『恐怖』があった。

―その少し前―

俺らは保健室を後にして生徒会準備室に向かっていた。

「それにしても、書記の楓(かえで)って人は強いんですか？」
「お前たちより遥かに強い」
「…そうですか」
「ん？　どうした」
「いや、俺たちより強い人に挑むのかと思うと」
「大丈夫だ、私もいる。よっぽどの事がない限りは心配の必要はないだろう、それにお前たちはまだ成長中だからな」

最後の言葉を聞くと、俺と烈は笑みを浮かべずにはいられなかった。
遠まわしに期待してる。そう言ってくれたんだから。

しかし俺は改めて思う。
一人の女子生徒、いや少女を三人がかりで襲おうというのは果たして良い事なのだろうか。という疑問を。
『戦い』という中にいてこんな事を考える俺は甘いのだろう、愚か

者だろう、だけど俺は悪人じゃない。
だから、考える。
果たして、自分は傍から見ればどんな風に映ってしまうかを。
十中八九、悪だ。

「あのー　三人で襲うってのはどうかと思うんですけど」

俺の言葉は二人の何かを刺激した。

「何を言ってるんだ？　敵の心配などするな！」
「そうよ！　せっかく大義名分掲げて虐められる機会なのに！」
「いや烈。先輩の言っている事は理解できるが、お前の言っている事は完全に趣味（エゴ）だぞ？」
「何よ！　趣味でもいいじゃない、それでモチベーションが上がるんだから！」
「な、それは大いに問題があると思うだけ」
「いいじゃないか」

先輩のその一言に俺は呆気にとられる。

「モチベーションが上がるのは良い事だ」
「やったー！　先輩のお墨付きゲット♪」
「くっ」

どーよ？　と悪戯な笑みを浮かべて俺をおちょくる烈。
そこまでは良かった。
何事もいつも通りだったんだから、問題は勢いよく生徒会準備室に突入した後だ。
そこにはいてはいけない人が居た。

居ては困る人、出会えない方が限りなく幸福な人。

―生徒会準備室―

「やっぱ生徒会で一番弱い楓ちゃんを狙ってきたか～」

「会長。私は弱いんですか？」

黒渕眼鏡を掛けた少女。いや、生徒会書記の春原　楓は会長に対して冷たい目で抗議する。

「うっ……やっぱ生徒会で一番頭がよくて弱い楓ちゃんを狙ってきたか～」

「へぇー　やっぱ私って弱いんだ」

あからさまに落ち込んで、軽蔑の眼差しで会長を見る書記。

「ひっく…ひっく…やっぱ、生徒会でか弱くて頭の良い楓ちゃんを狙ってきたかー！」

「会長。尊敬してます」

会長は涙を拭き始めた。

なにこの漫才。

会長って人が余計分からなくなったよ。

本当に恐れてよかったのか？

だが、そんな呑気な思考は一瞬で吹き飛んだ。

そう涙を拭き終わって目を見開くと、体中に悪寒が襲い硬直した。

「さてと。後ろの二人はどうしようかな～　新入生に三年生が手を上げるのもアレだしな～」
「見逃して…貰えるのですか？」
稜姫先輩、今何と言った？
「それ無理。生徒会もそろそろ反撃しようかな～　って思ってたからさ。あなた達には狼煙になってもらうよ、生徒会反撃のね」
刹那、稜姫先輩は何の抵抗も出来ず、鮮血を撒き散らしながら廊下に吹き飛ばされた。
「……」
「……」
俺も烈も言葉が出ない、いや出せない。
会長…あの人が喋ることを許可してくれなければ喋れない。
「さてと、残り二人か」
会長はそう言うと気だるそうに右手を烈に向けた。
すると、烈は突然痙攣を起こし吐血して床に崩れる。
床は稜姫先輩の鮮血と烈の吐血で俺の足は血の水たまりに浸かる。
夢、夢だよな？
そう、夢だ。
俺が初めて現実という事象を否定した瞬間だった。

１６　現実と非現実の差は個人による。（前書き）

ＶＳ生徒会編　第五話です。
感想などありましたら、どうぞ。

１６　現実と非現実の差は個人による。

「あとは君だけだね～」

恐怖は一歩、一歩と俺に近づいてくる。

来るな。
来るな、来るな！
来ないでくれー！

何でこんな小さい少女に俺は恐怖してるのか理解できなかった。
いや、理解したくなかった。

完全なる拒絶。

「君さ、何かリアクションしてよ？」

何を言っているんだろう、俺は恐怖で顔が歪んでいるはずなのに。

「楓ちゃん、手鏡持ってたよね？」
「はい」

ポイッ、と手鏡を会長に投げ渡し、会長は手鏡を俺に向けた。
鏡に映ったのは俺、無表情の俺だった。
心はこんなにも怯えてるのに、何で無表情なんだろう。
あぁ、人って本当の恐怖に直面したらこうなるのか。

なんて悟る。

「少しおしゃべりをしようか？　私は飯塚（いいずか）　朱音（あかね）、君の名前は？」
「お…俺は……北条　秋人…です」
「やっぱ覇気に当てられて上手く喋れないんだ？　でも君は私にやられるんだから仕方ないんだよ」

喋れない、この人の顔を見ることさえ今の俺はできない。
顔が上に上がらない、視線を合わせられない、これが格の違い。

「ダメか、つまんな～い。バイバイ」

会長はビンタでもしようというのか、右手を振りかぶる。

あぁ、終わる。

そう、覚悟した時だった。
身体が勝手に、腕が勝手に、動いた！
脱帽していた俺がだ！

手は一切無駄の無い動きで五月雨の柄を握り、抜刀。その勢いのまま会長を斬ろうと腕は動くが、会長は二歩後ろに下がり一撃をかわす。

「まさか、私と殺リ合う気？」

笑った。
満面の笑みを浮かべての問い。

「いいだろう」

何で喋る？

何で俺の意思に相反して声が出る？
これは一体何が起こっているんだ？
（分からないのか？）
誰だ？
（オレはお前だよ）
俺…だと？
（死なれちゃ困るんだ。オレは死にたくないんでな）
死ぬ？　会長が俺を殺すとは思ない。
（違う、お前の身体を心配しているんじゃない。精神を心配しているんだ）
精神？
（あぁ、今のお前は稜姫と烈をやられたのに酷くショックを受けて精神崩壊を起こしかけている。だからここはオレに身を委ねろ、悪いようにはしない。オレはお前なのだから）
「行くぞ？」
「なっ」
オレは”人間”の動きを逸脱して、会長の眼前に移動する。

つまり、瞬間移動をなした。

「終わりだ」
「まだまだ」

五月雨は会長の首筋一ミリ手前で静止した。

「ほぉ、なかなかやるじゃないか」
「君は一体誰？　秋人君じゃないよね」
「いや、オレは北条秋人さ」
「そっ、でも私には勝てないよ？」
「それはどうかな」

オレは会長の拘束から脱する為に、オレの能力を再び使う。
オレの能力は”神格化”というものだ。
能力発動と同時に”人間”という階級から最上級に位置する”神”と同等の席に座る事が出来る。
結果、如何なる能力も、如何なる事象もオレには意味を成さない。
ただ、北条秋人（俺）には効かないがな。

そしてもちろんこの能力の行使には制限がある”神”と同じ席に座るのだから当然の事だ。
制限は二つ、

・五分という制限時間。
・オレと俺の同意と莫大な精神エネルギーの消費。

精神エネルギーというのはいわば集中力、気力と同意だ。

なわけでオレは今”神”と同等の力を得、天井に足を着け会長を見降ろしている。

「凄いね。私の拘束…いや、能力を破るなんて、君は肉体強化系のはずだけど？」

「今のオレは違う、肉体強化系でも神経強化系でもない。言うならば限界突破（リミット・ブレク）がオレの種類だな」

「ふ～ん。なんか羨ましいよ、でも”ただ”でそんなこと出来ないよね？」

（さすが会長、勘がいい。オレ、大丈夫なのか？）

安心しろ、オレは負けたりしない。

（だけど、会長は強いぞ？）

オレはもっと強い。

（…そう）

なんだ、何か言いたそうだな？

（なんかさ、俺って弱いな～　って思ってさ）

はぁん、当たり前だ。お前は人間だからな

（それどういう意味だよ？）

その内イヤでも理解する事になるさ、オレは戦闘に集中させて貰うぜ？

そう言ってオレは天井から足を放して刃を会長に向けて突刺さそうとする。
が、会長は一歩横によけ、その勢いを殺さず流れるように蹴りをオレに入れる。
しかし、オレはすでにそこにはいなかった。

オレは会長に斬りかかろうと背後で五月雨を構えていた。

「やるね〜　私も本気ださなきゃ」
その言葉のあと、会長は空気を気押してオレ動きをほんの一瞬止め、瞳の色を紅色に染めていた。

「それが本気か？」
「うん、もう君を見失う事はないよ？」
「そうか、では試させて貰う！」

なんの動作もなく音速突破で背後に回る。

「見えてるよ！」

裏拳…！

オレは上体を後ろに反らしてかわし、そのまま脚で会長の顎を蹴りあげる。

「？っ！」

当たった…がまだか。

会長はその場に踏みとどまった。

おい、俺

（なんだよ？）

少し早いが時間切れの様だ。

（おいおいおい！　聞いてないぞ、そんな事！）

今初めて言ったのだから当たり前だ。あとは任せる。

（無責任にも程があるぞ！）

…指が俺の意思で動かせる。

しかし、それの認識と同時に俺の脳は揺れる。
骨が軋む、筋肉が悲鳴を上げる。
身体が咆哮する。

ダメージか。

理解した、オレの残して行った置き土産だ！

「どうしたの？」
「いや～　もう無理っす」
「戻った…の？」
「えぇ。まぁ。だから見逃して貰えませんかね？」

「…無理♪　脅威は早めに葬っておかないとね♪」

そう言って、身動きの取れない俺に駆ける会長。
会長の指が眼前に迫った時だった。

「待て！」

と声が部屋に響く、そこに立っていたのは倒れているはずの二人と、
会長の兄だった。

１６　現実と非現実の差は個人による。（後書き）

なんか、スゲェー　能力だなー　と作者も思います。
この先、大修正がないか不安で堪りません。

17　1＋1＝？　"未知"ってカッコイイよね。（前書

VS生徒会編　最終話です。

17　1＋1＝？　"未知"ってカッコイイよね。

「待て！」

その言葉と共に会長は動きを止める。

そしてジロッと声の方を睨む。

「あらあら、お兄ちゃんに…二人まで」

「少しやり過ぎだ。上級生がみっともない」

「…私は、まだやれますよ？」

「私だって……まだ、虐められますよ」

稜姫先輩と烈は血塗れの姿で戦意をアピールしている。

（なんて精神力だ。俺に半分でも分けてやって貰いたいぜ）

おい、何で引っ込んだ？

（俺の気力がガス欠寸前だったからさ、俺が死んだらオレも死ぬんだ。だから引っ込んだ）

俺の精神が弱いと？

（それはお前が一番理解しているだろう？）

言ってくれるじゃないか。

（オレは俺でもあるんだ。それくらい分かる）

それにしても、酷い置き土産を残してくれたな。

（仕方ないだろう、本来ならあと四分くらいは戦えたんだ。お前が弱いばっかりに”神格化”が未完成だったんだ、ダメージが残っていて不思議はない）

あれで本来の力じゃない。って言うのか？

（そう言っているだろう、あれは”人間”より多少上位になれただけだ。”半精霊”といったところか）

”半精霊”ね。大層な名前だな。

（まぁな。本来”神”と同席の存在なんだぞオレは、なのに宿主様が情けないばかりに本領発揮できなかったって訳だ）

そりゃー　悪かったな。

（次に出て来る時にはもうちっとマシになっててくれよな？　俺」

「…分かったよ」

俺の返事は誰にも聞こえることなく消えた。

「お兄ちゃんはともかくとして、あなた達まで私の前に立つなんてね。またボコられたいの？」

「うっせー　ガキが…ゴチャゴチャと」

「私はまだ本気でやっていませんから」

「ふ～ん。じゃあ第二ラウンドと行きますか？」

場に再び緊張が走り、誰かが動いたら”戦争”が始まる予感が俺を駆けた。
その時、烈の足が横に少しズレ、烈を除いた三人が前へ飛びだそうと膝を曲げると、

キーンコーンカーンコーン。

と授業開始を告げるチャイムが鳴り響いた。
その音と共に空気は一転、平穏に戻り「あ～あ、おわちゃった」と会長は残念そうにボヤく。
稜姫先輩も柄から手を放し、ハンカチを取り出して顔の血を拭う。
委員長は無言で背を向けどこかへと歩き始め、烈は緊張の糸が切れたのか膝が笑った後に尻もちをついた。

「やれやれ…また姉さんの世話になりそうだ」

先輩はそうため息交じりに言葉を零す。

―保健室―

「はい。これで完治よ」
「すいません。度々」
「いいの、いいの。これが私の仕事なんだから」

どうも先生は治癒系統の能力者で、その部類ではトップクラスなんだとか。
確かに切り傷とかすぐに直したからな、便利なもんだ。
烈は今ベッドで大人しく寝ている。

先輩は先生の悪戯が怖くて、完治すると足早に保健室を離れた。

「にしても、ようやく終わったわね」

「えっ？」

「えっ、ってまさかまだ終わってないと思ったの？」

「まぁ、何も知らないんで。まだ続いてるのかと」

「もう終わったわよ。あのチャイムが終りの合図よ、あとは話し合うのみ。暴力的な訴えはもう終わりよ」

「話し合い…ですか」

話し合いという名の暴力を行使しそうだな～　あの兄妹。

「今、何気にあの二人の事バカにしたでしょ？」

「おへっ！？」

「うふ、面白い反応ね♪」

瞳が笑ってる。

この人もSなの忘れてた！

やばい、やばい、やばい！

虐められるっ！

「さてと、稜姫ちゃんであそべなかったから。君で我慢しよかな♪」

妖艶な笑みを浮かべて顔を近づけてくる。

あー！

「ちょーーっと待ったァァ！」

烈が俺の頭を鷲掴んで自分に引き寄せ、「コイツは私の玩具だ！」

と先生に啖呵を切る。
先生は「他人の玩具を奪い取るのは嫌じゃないけど、生徒から奪うのはちょっと可哀想ね」と女王様に玩具を返却した。

っていうか俺、二人に人間扱いされてなくないか？

そしてこの時を持って烈と先生の間に変な絆が生まれた事を俺は後々思いしる事になる。

「烈、俺たちも教室に戻るぞ～」
「そういや猛授業始まってたんだっけ」
「そうだよ。先生御世話様でした」
「いつでも遊びに来てね～」

その言葉に俺は苦笑いでしか答えられなかった。
烈は「また来るよ～」と無邪気な笑みで答えていたが、スキルアップしそうだな。

教室に着くと、数学の先生からお説教を喰らい、宿題二倍という地獄の様な罰を言い渡された。
俺は絶望で顔色を悪くしたが、烈は何ともないよ。と言わんばかりの顔だった。

そういや、こいつは秀才だったんだよな～　くそー！

こうして生徒会との一騒動は終わりをみた。
だが、この時すでに運命の歯車は静かに動いていた。

１８　ネチネチしつこいと、痛い目見るぞ。（前書き）

閑話、ストーカー撃退編　始まります。

18　ネチネチしつこいと、痛い目見るぞ。

生徒会の一件から早一月、俺と烈は風紀委員会で目覚ましい活躍を見せて、
学園内で知らぬ者はいないと言わしめるまでになった。
だが、先輩方からはまだまだ”ひよっ子の新人”という扱いだ。

―1年校舎・風紀委員事務室―

「烈～　報告書まだか？」
「ちょっと待って、今書いてるとこだから」
「それ十分前にも聞いたんだけど？」
「うるさいわね！　アンタの分までやってんだからね！？」

怒りの剣幕で俺に鉛筆を投げる烈、俺はそれを人差し指と中指で挟んで止め、そのまま投げ返す。

「文房具は武器じゃないぞ～」
「分かってるわよ！」

ブン。と腕を振るって見事キャッチして再び報告書との戦いを始める。

なぜ烈が俺の分まで報告書を処理しているのか？
それは至って単純な事だ。

それは少し前に遡る。
互いに不良君を捕まえた帰りに売店の前で会い、烈が「報告書書くのメンドイからおみくじで悪い方引いた方が相手の分も書くってど

うよ？」と俺に提案したのだ。
烈はどうも今朝の占いで自分が一位、俺が最下位である事を知っていたらしく、自分は今日ツイてる。と過信しての事だったらしい、結果はというと俺は大吉、烈は大凶だった。
さすがにこの時の烈は激しく落ち込み、売店のショーケスを破壊してしまうほど取りみだした。
まぁ、その始末書も＋されて今書類との闘いに奮闘している。

「自業自得なんだからな～　俺は悪くないぞ～」
「あー　うるさいな！　そんな事は分かってんだよ！」
と、今度はマグカップを投げてきた。
「物を投げるのは止めとけよ。これも一応備品なんだから始末書が増えるぞ？」
そう言って俺はマグカップを投げ返す。
「ふん。余計な御世話だ」
そう言いてマグカップを取ると、立ちあがりコーヒーメーカーでコーヒーを注いで一口。
「それにしても、今日は結構な人数捕まえたな」
「確かに、日に日に能力に目覚める奴が増えて面倒だ。いっその事一人くらい殺って見せしめにするか？」
「おい、冗談に聞こえないんだけど？」
「今のは本気で言ったんだ。冗談に聞こえるわけがない」
「人殺しはさすがにダメだろ」
「”誅戮の巫女”なんて二つ名持ってる奴もいるんだ。一人くらい

構わないと思うけどな～」
「人としての尊厳は守れよ」
「そうだなー　この書類の山が明日少しでも減ってたらな」
ため息交じりで再び烈はデスクワークを始め、暇人な俺は一眠り。
といこうかと目を瞑ると戸が勢いよく開いた。
それはもう戸が変形してしまうんじゃないかと思うほどデカイ音を上げて。
そして、入口にはマッチョな男一人と赤いロングヘアーが目立つ女性が一人。
「先生。何かご用でも」
俺はそう言って先生を席へ座るように勧める。
「北条、岩裂、折り入って頼みたい事があるんだ。アカリ先生」
「えぇ、これを」
そう言って写真を一枚、テーブルに置く。
「これは…」
「…酷いわね」
俺も烈もこの写真を見ると、少し気分が悪くなった。
写真には女子生徒を模した人形が切り刻まれ、見る限りでは本物の内臓と血が飛び出していた。
「これ、人形ですよね？」
「勿論よ。でね、この人形のモデルの子に相談されて」
「で、我々が今ここにいるという事だ」

「なるほど、その子は今どこに？」
「一応自宅にいるわ」
「って事は、先生たちは私達に犯人を見つけ出して殺…拘束しろって言いに来たのね」
「そうよ。お願いできるかしら？」
「そりゃー…」
「勿論！　こんな女の敵は私が懲らしめてやる！」
「ありがとう！　じゃあよろしくね。あとこれ、その子に聞いて犯人かもしれない子のリスト」

リストを残して先生たちは事務室を後にした。
俺は烈がリストを読み終えると、俺もリストに目を通す。

「これ、二年生も入ってんのか…稜姫先輩に連絡しとこうかな」
「ダメ！　これは私達の手で片をつける…っ！」
「あぁ…分かったよ。だからちょっと下がれよ、近い」

烈は拳を握りしめ、何やら決意を固めている。
こりゃー　犯人が死なない事を祈らなきゃな。

こうして、昼食をとる間もなく俺と烈は昼時の校内へと繰り出す。

１８　ネチネチしつこいと、痛い目見るぞ。（後書き）

感想などありましたら、どうぞ。

１９　尾行ってなんかワクワクするよね。でもしつこいと犯罪。（前書き）

ストーカー撃退編　第二話です。

19　尾行ってなんかワクワクするよね。でもしつこいと犯罪。

先生からの依頼を受け、俺と烈はストーカーを捕まえる為に校内を駆けまわった。
リストに載っている連中を一人一人あたり、時には暴力的にお話し、時には拷問的にお話し、時には弱みをちらつかせながらお話したり、それはもう大変な時間を過ごしました。
まぁ、全部烈が率先してやってたんだけどね。

そんな訳で俺の出番なんてあるわけもなく、傍観者気どりで見ていました。はい！

「あー　一人もいなかった！」
「まぁまぁ、烈。コーヒーでも飲んで落ち着けよ」

俺は缶コーヒーを烈に投げ渡す。

「こんなモンいるかー！」

ボウッ！

炎に包まれた缶コーヒーはあっという間に溶解、中身は蒸発、俺の金は無駄になった。

「っておい！　俺の善意返せー！」
「善意？　笑わせるな！　今私に必要な善意はストーカーを目の前に差し出す事だァァ！」

メラメラ炎をバックにストレスを発散させる烈、気の所為か周りの

視線が痛い。

「でもまぁ、引き受けたからには捕まえないといけないんだよな～」

「捕まえる？　違う、血祭りにあげる事だァァ！」

「あー　もう。お前はどこぞのヘビメタのボーカールですか？　少しは落ち着け」

「だって、許せないじゃん！　ストーカーのせいでこんなに楽しい学園生活をエンジョイ出来ないなんて！」

と涙目で心境を語る烈、そんな顔で俺を見るな！

俺が涙目に弱い事はお前が一番よく知っているだろうに、卑怯者め…。

「お前の気持ちはよく分かったけど、どうやってストーカーを見つけるんだよ？」

「よくぞ聞いてくれた。私も今思い出したんだけど、同じ班に相内（あいうち）里奈（りな）って子いたろ？」

「あぁ、確かにいたけど。相内さんがどうしたんだよ？」

「里奈ちゃんの能力がさ、どうも他人に変身する能力みたいなんだよね」

「あー　それ使ってストーカーさせて捕まえると」

「正解♪　現行犯で捕まえれりゃ言い訳できないでしょ」

「でも相内さんの同意はどうする？」

「簡単だよ。任せておいて」

と言って教室へ向かった。

それから五分が経とうとした時、烈と相内さんがやって来た。

声をかけようとしたが、なぜか相内さんは涙をポロポロ零していたので掛けるに掛けれず、俺は烈に駆け寄り小声で、

「一体なにしたんだよ？」と問いをぶつける。

「何、少し協力してくれるように頼んだだけだよ」
「どうやって頼んだ？」
「想いを寄せる子に　以下省略」
「そんな事言ったのか！」

えへへ。と烈は笑う、そんなおぞましい事を言ってのけるお前って…。

「里奈ちゃん。よろしく」
「う、うん」

返事すると、相内さんの身体が光に包まれる。
あまりの眩しさに目を瞑る俺、光が収まるとおっとりなイメージの女の子が姿を見せる。

「どうかな？」
「うん、完璧♪　その格好で校舎ウロウロしてきてよ」
「分かった。だから」
「分かってるよ、アレはしないから」

涙を拭きながらトコトコと場を去る相内さん。
その後ろ姿はあまりのも悲しげだった。

ごめんなさい。

そう内心で土下座する。

「さて、つけるわよ」
「お、おう……っていうかこれ俺達がストーカーじゃん」

「何か言った？」
「いえ、何でも」

相内さんと距離を取って尾行する事十分、さっそく怪しい奴発見！
烈が血祭りしに行こうとするが、俺が身体を張って止め、しばらく様子を見ることになった。
しかし、怪しい奴は一向に相内さんの後を追っている。
しかも、何か危なそうな雰囲気の容姿だし、これ案外当たりなんじゃ…そう思った時、烈も同じ事を考えていたのか、

「ストーカー　こらァァァァ！」

と両拳に炎を灯し、怒号を上げながら突進する。

「ちょっ、アイツしばらく様子見するって言ったのに」

その後を俺も精一杯力を出して追う。
ストーカーの命を守る為に、相内さんの精神を守る為に。

１９　尾行ってなんかワクワクするよね。でもしつこいと犯罪。（後書き）

次話、ストーカーと対決！
感想などありましたら、どうぞ。

２０　悪事はいつか必ずバレる。

「ストーカー　こらァァァァ！」

アイツは本当に仕方のない奴だな、俺の身にもなってほしいよ。

そんな叶うはずもない願いを抱きながら俺は烈の後を追う。

「必殺、炎皇爆裂拳！」

俺が追いついた時には、ストーカーと思われる男子生徒は黒こげの状態で虫の息、相内さんは気絶していた。

一歩遅かったか、アイツの怒りの表情は人殺せるからな。

「やり過ぎだ」

と烈の頭を軽く叩く、なぜ叩くかって？　そりゃー　いつもこうやったら元に戻るからさ。

「痛い、何すんのよ」

「捕まえるんだぞ？　誰が虫の息にしろって言ったよ」

「捕まえたんだからいいでしょ」

「まだコイツがストーカーって決まってないのに、間違ってたらどうすんだよ？」

「そん時は秋人、いつもの通りお願いね♪」

「はぁ～」

大きな溜息をついて俺は黒こげの男子生徒の襟首を握り引きずりながら事務室へ向かい、

烈には相内さんを一応保健室へ運ばせた。
で、俺は椅子に座って男子生徒が目を覚ますのをコーヒーを飲みながら待っていたんだが、烈が戻ってくるなり男子生徒に馬乗りになって顔をボコ殴りするわ、アツアツのコーヒーを浴びせるわで一騒動あって男子生徒は目を覚ました。

「で、藤崎先輩。あなた本当に　えーっと」

俺は一枚の紙に目を落として名前を確認する。

「岬（みさき）　優奈（ゆうな）さんをストーカーしてないと？」
「さっきからそう言ってんだろ！？」
「じゃあ何で一年校舎に来てたんだよ？」

烈が俺の指摘したい所をものの見事に指摘しやがった。
おいしいところ持っていきやがって。

烈の指摘に藤崎先輩の表情は歪む。

「もうね。白状しちゃった方がいいんじゃないですかね、また黒こげは嫌でしょ？」

と俺は人差し指で烈を指さす。
藤崎の先輩はビクンッと震えて視線を烈に向けると、烈は口から炎を吐いていた。
それを見るや否や藤崎先輩の顔から血の気が引いた。
先程の事を思い出したんだろう、可哀想に。

「お、俺はしてないんだ！」
「そんなに退学したくないですか、まぁそうですよね。こんな夢を

描いたような学園から去りたくないですもんね」

そう、この御南茂学園の校則は女子生徒には大変素晴らしい内容が多い。
その一つが、ストーキング行為をした者は早急に退学処分とする。
というものだ。
退学するという事は学園の秘密である、能力に関する全ての記憶が消去される事を意味する。
かくして、この学園に通う男子生徒とストーキング行為を働こうとする者はゼロに等しい。

「お、お前らが悪いんだからな」
「「はぁっ？」」

次の瞬間、藤崎先輩が机に手をつけると机が爆発した。
四方八方に散る残骸、俺は爆発の瞬間地震訓練の如く机に身を隠して破片の嵐をやり過ごす。

「烈！　無事か！？」
「あいつ、ぶっ殺してやる！　よくも私の肌を傷つけたなー！」

あー　無事ですね。
何よりだけど、

「はぁー　まためんどくさい事になったなぁ」

爆発のせいで事務室は無茶苦茶、後片付けが大変そうだ。
しかも藤崎先輩は見事エスケープときた、これはさすがの俺も頭に来るな。

「烈」
「なに？」
烈の返事に俺はめずらしく黒いオーラを放ちながら答える。
「…狩るぞ」
「オッケー」
烈は待ってました。と言わんばかりの笑みを浮かべる。
俺は五月雨の柄に付いたホコリを払い、烈と共に再び校舎に狩りに出た。

そしてこのバカ広い学園で人を探すなんて行為はあまりにも大変な事なので、風紀委員会から支給されている携帯を使う事にした。この携帯には風紀委員会全員のメアドが詰まっているため、学園中にいる数百人の風紀委員に連絡が取れる。
だから、俺は藤崎先輩の画像を付けて全員に送信。

それから約一分後、返信のメールが来た。
「……校庭、校門向かってるな。烈、追いつけるか？」
「モチ、炎の推進力をナメないでよね」
次の瞬間、烈は足の裏から炎を噴射してロケットの様に校舎の壁を突き破って校門へと向かった。
俺は烈の通った後を脚力全開で駆ける。
さて、烈は先に着いているんだろうけど、ガマン出来るかな～
一抹の不安が脳裏をよぎる。

そして案の定、烈は拳に炎を灯しながら藤崎先輩と格闘戦を繰り広げていた。
いやはや、ストーカーにしてはえらい動きが良いな。と俺は正直に感想を抱く。

「さすがは二年生って事かな」

「乙女の敵が～　死ねー！」
「おっと」

烈の右ストレートをかわし、お返しにと右足で地面の土を烈の顔に掛ける。

「クソ」

一瞬目を瞑る。
しかし、藤崎には一瞬で事足りた。

地面に手をつくと、地面に一筋の光が烈の足元まで伸び、爆発。

「よしっ、これ」

勝利を確信していた藤崎にとっては信じられない光景が目に飛び込んできた。

「私はね。陰気で、しつこくて、卑怯ものが大嫌いなんだよ！」

紅蓮地獄！

その声が校庭に響き渡ると、地面に亀裂が走り亀裂から紅蓮の炎が吹き出し、炎が藤崎先輩を襲う。

これ、やり過ぎでしょ。
どうやって止めたもんかな～

（力を少し貸してやろうか？）

久しぶりに声が聞けたな。

（少しは成長したみたいだからな）

オレに褒められるなんて嬉しいな～

（で、どうなんだ？）

その必要はないと思う。

（何でだ？）

だって、稜姫先輩が烈目掛けて走ってるだろ？

（あぁ、なるほど。少し残念だな）

久しぶりに表に出れると思ったからか？

（正解だ。たまには外の空気が恋しくなるさ）

そっか、じゃあ今度機会があれば力を貸してもらえるかな？

（勿論、俺の為ならオレは喜んで力を貸すさ）

「秋人！　何をボケっとしていた」
「すいません。あぁなった烈を止めれた為しがない物で」
「だからと言ってボケっとするな」

烈は稜姫先輩の接近には気付かなかった。
あそこまで頭に血が上っていたら気付ける物も気付ける分けがないからな。
結局、稜姫先輩に気絶させられ、藤崎先輩は瀕死の重症で保健室へ急行、俺は稜姫先輩の説教を受け、
無事？　に先生からの依頼を果たせましたとさ。めでたし、めでたし。

余談。
亀裂の入った校庭の修復を徹夜で秋人はやらされました。
それはそれは大変な作業だったそうな～

２０　悪事はいつか必ずバレる。（後書き）

感想などありましたら、どうぞ。

21　後ろを見るな、立ち止まるな、前を見て歩け。

五月下旬、もう寒さも感じなくなってきた今日この頃、俺はピンチを迎えていた。

「であるからして、明日から一週間テスト週間で～す。皆勉強しておくように。はい、おしまい」

やる気の無い、脱力感満点の声が相俟ってイライラするな。
しかも何？　いきなりテストするって、しかも明日から？　予習も復習も出来るわけねぇーだろう！
進学校だからって理由はなしだぞ！？
ここでそれ出したらもう何にも言い返せないからね？
しかも、担任がこんな風貌と性格だから忘れてたんじゃないの？
って疑問抱いちゃうからね。
とにかく、

「先生、なんでいきなりテストが始まるんですか？」

と、俺は先生に質問してみます。

「あ～　それがな、先生忘れてたんだよね～」

このー　あんぽんたんがぁ～！
忘れてた？　教育者の言うセリフかよ、通用しないよ、っていうか
それでよく教員免許取れたな！

「先生、それじゃあウチのクラスだけ一週間先のばしってできませんか？」

「なんだ～　北条は自信がないのか～？」
「先生、いい加減その脱力感満点の声は止めてくれませんか？　イライラします」
「あ～　でもね。これが先生だから、無理」

プッチン！
俺は笑顔で問う。

「斬っていイですか？」
「痛いから無理だな～」
「…抜刀」
「落ち着け秋人！　お前がキレるなんて早々ないから最後まで見てみたいけど、先生にそれはまずい！」

烈が奇跡の発言をしている。
なんか烈の言っている事が珍しく正論に聞こえるのは俺だけだろうか？

とかなんとか思っていると、烈の鳩尾フックが見事に決まり、頭に上った血は元に戻る。

「なんか、記憶が曖昧なんだけど。烈？」
「いや、お前少し寝ぼけてたからな。夢…なんじゃないか」
「そうか、そう言えば最近寝不足だからな」
「はいそこ。漫才終わったなら、先生話し続けるけどいいかな？」

なぜだろうか、この先生の言葉が妙に腹立たしいのは。

そんな俺の思いなんて知らないよ。と言わんばかりに先生は脱力感抜群の声を惜しみなく出す。

「で〜　皆さん。ともかく明日からテスト何で、今から自習という事にしま〜す」

生徒は全員沈黙で了承し、教室にはペンを走らせる音と教科書やノートをめくる音が行き交う。

俺は並々に勉強はできる。

頭が飛びぬけてイイわけでも、同情するほど悪いわけでも無く、『並み』つまりは普通という事だ。

ちなみに今まで平均点以上の点数を取ったことはない。

「なんでこんな時に限って携帯鳴んないんだよ」

「秋人、ボヤク暇お前にあんのかよ？」

「烈、お前は良いよな〜　秀才様は勉強の必要がなくて」

「まぁーな　凡人とは出来が違うのだよ、凡人とは」

「くー　スゲェームカつくなその言い方」

「ははは、愉快愉快」

と、頬杖をついて俺を嘲笑う。

なんて余裕、さすが全国一位の秀才、俺とは本当に出来っていうか格が違うな。

烈の言う事を受け止めつつ、教科書に目を向けて見るが。

う〜　やっぱ勉強は…合わないな

キーンコーンカーンコーン

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「終わったー！」

万歳で席から立つが、「はい、そこ。先生まだ話す事あるから、座りなさい」と指を指された。

「え～　思い出したんだけど。テスト一日目と二日目は能力検定試験なので、それなりの覚悟しておくように」

「「「「「「「「「「「「「えぇぇぇぇぇぇ！」」」」」」」」」」」」」

さすがにこの発言には全員が驚きの声を上げる。

俺と烈は声を上げず、少し笑みを浮かべたのは誰も知らない。

そんなこんなでこの人は一年生全員が放課後になるとすぐさま帰宅し、家族との時間を満喫したという。

残念な事に俺は親、というか家族と過ごす時間なんて皆無。

なぜかって？　それは簡単、俺は今現在独り暮らし中だからだ。

両親は二人とも海外の仕事場に転勤、兄貴は某大学で教授として教鞭をとっている。

なわけで北条家には俺一人という事で独り暮らしなわけだ。

「あ～」

大きな欠伸をして俺はベッドに横になる。

明日が楽しみだな～

なんたって勉強しなくていいんだ。

まさか学校に通ってて勉強しなくていい日が来ようとは。

直に俺は夢へと落ちて行った。

21　後ろを見るな、立ち止まるな、前を見て歩け。（後書き）

読んで頂きありがとうございました！
次話から　試験編始まります。

22　学校で一番怖いとこは屋上だと思う。

―広域競技場―

本日晴天、雲一つない戦闘日和。
そんな今日、俺達一年生は競技場へと集っていた。

「では、生徒会長からの御言葉です」
「あ～　テステス、テステウッ」

（（（（（（（（（（（（（（（（（…噛んだな））））））））））））））））

「オホン。今日から始まる能力検定試験で一定以下の成績の人は、退学して貰いま～す♪」

少しの沈黙の後に、一年生全員が悲鳴にも似た声を上げた。

そして「何でだよ！」「身勝手すぎるだろ！」「金返せ！」「ぺちゃぱいは引っ込め！」「チビは帰れ！」「子供会長は家で寝てろ！」等々、なぜか生徒会長への嫌みに変わり、会長は沈黙を破り言葉を発した。
「…黙ってなさい」と、顔は笑っているのに目が笑ってなかった。
これ以降、会長への誹謗中傷は一切なくなったという。

「さて、理由は一年生が多いから…以上です」

きっと叫びたい奴、文句を言いたい奴はいるだろう、だが言えない。
いや、言ってはいけない状況が生まれてしまっているのだ。
アレを見せられた後で反論できる奴なんているわけないじゃないか、

まぁ兄である委員長なら言えるかもしれないけど。

「え～　モニターに注目～」

すると、モニターにはトーナメント表が映し出された。

「今から皆さんには一対一で戦って貰います。あと、殺しちゃダメだよ？　でも三分の二殺しくらいまではＯＫですよ～
あと会場はこの学校の全域なので、出口で予定表貰ってくださいね～　はい、解散！」

「俺は…校舎！？　しかも屋上かよ」
「いいな～　私なんかプールだぞ？」
「泳げばいいじゃん」
「まだ時季的には早いし、水着持って来てない」
「あー　そうか。だったら普通にやればいいじゃん」
「そうだな。プールを真っ赤に染めてやるよ」

そんな物騒な事を言って烈はスキップでプールに向かった。

マジで誰か死ぬかもな。

まぁ俺も俺で物騒な事考えてるんだが、今は自分の身が大事だ。

「屋上ね～　誰が場所決めたんだか」

でもまぁ、俺もそこそこ強くなったし負けるような事はないよ…な？

そんな期待をしながら俺は屋上へ上った。

―屋上―

「俺の対戦相手は…君か」
「吉瀬（きせ）　龍己（たつみ）だ」

そう彼は自己紹介をする。

「俺は北条――――」
「知っている。風紀委員の北条秋人だろ」
「へぇー　結構有名なんだな」
「あぁ。あの、あの、い、岩裂さんといつもイチャイチャしてるんだからな」

あれー　なんか俺、恨まれてる？
嫉妬ッスか、アイツの本性も知らないくせいによく言うな！
同中の奴でアイツに好意抱く奴なんて一人もいないんだぞ！？
皆アイツの本性知ってるからな！
まぁ、たまにM君が鞭持って告白してるって噂は聞いた事あるけど。

「その話は置いといて、君の能力は？」
「敵に塩を置くような真似するかよ」
「俺は有名なんだろ？　じゃあどんなスタイルか知ってんだろ、フェアーじゃなと思わないか？」
「…確かに」

あと一押しってとこか
これで止めだ！

「それにな。烈はひねくれ者が大嫌いなんだ」
「！　そうか、そうだな。僕は神経強化系で低レベルの魔法が使える」
「あ～　この前授業でやってた」
「そうだ。万能魔法低級なら大抵は使える」

はぁ～　なんか羨ましいな。
こういう時に神経強化系が眩しく見える。

「ってことは君、科学系じゃなくて魔法系が強いんだ」
「あぁ」

▼▼▼説明▼▼▼

神経強化系にはさらに区切りがあり、『魔法系統』『科学系統』に区別される。
さらに魔法系統にも科学系統にも数多くの種類が存在している。
例を上げるなら、魔法系統　黒魔術科　といった感じである。

説明終了。

「さて、時間も頃あいだし。僕的には始めたいんだが？」
「俺は一向に構わない、タイミングは君に任せる」
「余裕だな？」
「そりゃー　伊達に風紀委員やってないから」

両者は睨み合い、吉瀬は右手に光球を創り出し、俺目掛けて投擲。

「遅い！　五月雨抜刀」

抜刀と同時に渾身の力を込めて斬撃を光球にぶつけ、玉砕し斬撃は吉瀬に向かうが、さすがに避けられた。

「やるな」

「当たり前だ。北条秋人　推して参る！」

俺は再び五月雨を鞘に納め、

「華天流演武　二つ目　『昇華』」

昇華。先輩から教えて貰ったばかりだが、実践でこそ試すべきだろ！肉体強化系の能力を刀に流し込み、強度・破壊力を特化させる強化技。

正常に発動したことを認識すると、俺は柄を握ったまま吉瀬に向け駆ける。

「光槍！」

「なっ、それ確か中級じゃ」

「誰が低級しか使えないと言った！」

光槍を構え迎撃態勢をとる吉瀬、俺はそんなのお構いなしに前へ進む。

「華天流演武　抜刀術　『返し手』」

『返し手』は刃を使うのではなく、峰で攻撃する珍しい物だ。

俺もまさか峰うち以外で峰を使う事があるなんて思いもしなかった。

光槍に向け峰が触れると、光槍は振動と共に亀裂が走り粉砕。

吉瀬は目を大きく見開いている。
自信があったのだろうか、それともただ単に驚いているだけなのだろうか、
俺には分からないが、この上ないチャンスという事だけは分かった。
振り抜いたと同時に刀を一回転し、持ち方を変え柄の先で鳩尾を一突き。
おぶっ。
と声を上げ、気絶。
「俺の勝ち～」
貰った紙に書いてあったのだが、勝利の判定は相手のネームバッジを開催本部で見せる事なので、
俺はありがたく吉瀬と書かれたネームバッジを頂戴した。

２２　学校で一番怖いとこは屋上だと思う。（後書き）

次話は烈視点で書いてみようと思います。

２３　体を鍛える前に心を鍛えよ。（前書き）

今話は烈視点です。

23　体を鍛える前に心を鍛えよ。

―プール―

今私の前には見るからに戦いがいのあるヤツがいる。
身体は引き締まっていて、バランスの取れた体格だ。

「名前は？」
「俺は堤（つつみ）　悠哉（ゆうや）」
「私は――――」
「言わなくても分かる。岩裂　烈だろ？　有名人だ」

なかなか嬉しい事を言ってくれるじゃねねぇーか、
でも、私の話を途中で遮ったのは気に食わない。

「レディーファーストだ。一発いいぞ？」
「へぇ～　余裕ね」
「まぁな。力を思う存分使えるんだ、負けるかよ」
「言うわね」

さて、こいつは本当に強いのか、力に溺れたバカか、どっちかな～
私的には前者の方が嬉しんだけど、秋人なら後者の方がイイって言うんだろうな～
ホントあいつは強いくせいして謙虚というかなんというか、とにかく弱気なのよね。
……いやいや、今はあいつの事考えてる場合じゃないか。

「じゃあお言葉に甘えて、行くわよ」

私から堤までの距離は五メートルってとこかな、
にしても、もうプールに水張ってるんだ。
横にプールがあるのに泳げないってのは何かもどかしいわね。
私は炎を拳に灯して接近戦を仕掛ける。

が、

バシャン！

私はずぶ濡れ、上空からいきなり水の塊が落ちて来たのだ。
おかげで炎は消え、服も濡れた。

「あーあ、夏服だったら透けてたのに、ずこし残念だな」

喧嘩売ってる？　売ってるよね？　いいわ。買って上げるわよ！

瞬間、私の体に炎が纏わりすぐに乾く。

「少し頭に来たわ、本気で殺るから」
「炎が水に勝てるとでも？」

この言葉を聞いて私は思い出す、あのクソ野郎の事を

『炎では水に勝てませんよ？』

思い出しただけでもイライラする、あのクソ野郎はあの時本気じゃなかった。
まだ何か奥の手を隠してやがった。それに、あの笑みが…癇に障る！

「お前、終わったよ。あのクソ野郎に似てるからな」
「クソ野郎？　誰だ」
「お前みたく水を操るクソ野郎だよ」
「へぇ～　でも俺は水を操ってはないよ」
「超能力系統…サイコキネシスってとこだろ、それでも水を自在操れるんだから意味は変わんないでしょ」

堤は自分の能力を当てられたからだろうか、少し驚きの表情を浮かべている。
これくらい風紀委員たる私には見当がつくんだから、それほど驚く事ではないと思うんだけど。

「さて、昨日の夜さ。私考えたんだよ…新しい虐め方をさ」

私は上着の内ポケットからアルコールの入った薄い容器を取り出す、そして蓋を開けて堤目掛けて投擲。
見事アルコールは空中で辺りに飛散する。

「これ…アルコールか！」
「ご名答、これ私が炎灯したらどうなるか分かる？」
「お前も巻き込まれるぞ！？」
「自分の炎は熱くないから平気、それに言ったでしょ？　殺るってさ…」
「こんなの水で流せば」

プールから波が突如発生し、床を水浸しにする。

「甘いわね、着火♪」

水面が燃える。

アルコールと水は混ざらないのだから、それに私は着火もできるし炎を操る事も出来る。
だから
私は指を指揮棒みたく振り炎を操り、プール一面を火の海にした。
「これくらいでどうした。俺が水に触れなければい済む話だ。それに水が操れなくなったわけじゃ――――」
「あー　はいはい。もうアンタの負けは決まったのよ」
堤は？　を浮かべる。
全く、無能とはこの事だな。
私はプールに指向け決着の言葉を放つ、
「灼熱の洗礼」
次の瞬間、炎は紅く、紅く燃え上がり水を水蒸気へと変えてゆく。
その光景に堤は目を見開く。
「誰が炎は水に勝てないって？　水なんかね、蒸発させたらお仕舞いなのよ！」
蒸発完了。
「さて、どんな風に虐めようかしら。火炙り？　皮膚剥がし？　それとも…ふふふ」
「やめてー！」

十分後。

「ネームバッジは頂いたし。新しい手法も試せたし、今日は良い日ね」

私は鼻唄交じりに開催本部へ向かう。

その後、水の張ってないプールから白目を剥き、精神不安定な少年が発見されたとか、そうでないとか。

２３　体を鍛える前に心を鍛えよ。（後書き）

どうでしたか？
作者的には自信ゼロです。っていうか烈というキャラが正直分からなくなってきました…ヤバイな。

２４　女心は秋の空　っていうか山の天気かな。

俺はネームバッチを渡し見事一回戦突破、軽く食事を取ろうと中庭のベンチに腰掛け寛いでいると、烈が弁当を持ってやってきた。

―中庭―

「なんだ。秋人もメシか」
「あぁ、少し腹減ったからな」
「どうだった？」
「楽勝～　お前の方は？」
「同じく楽勝だった」

隣に腰掛け、弁当を食べ始める烈。
パク、パクとおいしそうにおかずを食べている。

「なんだ。欲しいのか？」
「い、いや、そんな事ない」
「顔も知らない人間が作ったメシより、顔見知りの作ったメシの方が上手いと思うぞ？」
「うっ…k、くれるのか？」
「…あげるわけないじゃん」

せっかく勇気を出して言ったのに！
やっぱりこうなるんだな！

毎度のことながら、やはり堪えるな。
しかし、俺が何の行動もしないと思うなよ。

今まではお前の方が圧倒的に強かったから行動しなかったんだ。
今の俺は化け物並みに強いんだ！
やってやる、やってやるっぞォォ！

俺は烈が箸で摘まんで口に運ぼうとしている卵焼き目掛けて手を伸ばす、
目にも止まらぬ速さで。

「取ったぞォォ！」
「何を？」
「へっ？」

手に取ったものをよく見てみると、石ころだった。
少し固いな～　と思っていたがまさか石だったとは、っていうか見えてたのか！？

「見えてないわ、読んだだけよ」

心を読んだというのか！？
読心術の心得があるとは、幼馴染やってたが気付かなかった。

「読心術の心得なんて持ち合わせてないよ」
「……いや、もう完全に読まれてるんですけど」
「私が持っているのは人心掌握術よ」

黒い、黒いですよ女王様！

「つーことは何か、俺って操り人形？
…笑えねぇーよ！　っていうか俺という人格は造られたものだったのか！」

「…軽い冗談なのに」
「軽くねぇーよ、お前の言う事冗談に聞こえないからね！　現実味があり過ぎて重いんだよ！？
そこんとこ自覚しようよ！」
「まぁそんな事より」
「俺の危機はそんなことですか」
「お、お腹一杯だから、アンタに上げるわよ！」
「こ、今度はツンデレ！？」

もうお前という奴が俺には分からなくなったよ、烈。
あぁ、神様。なぜ貴方様はこの様な複雑怪奇な人間を誕生させたのですか？

「おいしかった？」
「あ、あぁ」

もう混乱し過ぎて味が分かんねぇんだけど、
こんな緊張初めてだよ。

「お知らせです。待機番号１番から１６番は校庭へ、１７番から３２番は森林エリアへ、３３番から４８番までは山岳エリアへ、４９番から６４番までは広域戦闘場へ移動してください」

と校内アナウンスが流れた。

「さて、行きますか」
「そうだな。秋人、負けんなよ？」
「誰に言ってんだ？　俺が負けるわけねぇーだろ」

25　いつもお偉いさんは身勝手すぎると思う。

「俺が負けるわけねぇーだろう」

そう言って烈と別れた。
うん、別れたんだよな。
あぁ、別に俺負けた訳じゃないよ？
ただね。不戦勝っていうのかな、相手が一回戦のケガが原因で辞退しちゃったんだよね。

しかも自称『運営部の者』って言うの人に「君は資質が十二分にあるから合格です。もう闘わなくていいですよ」とか言われて、それはもう嵐のように激しい二十分だったよ。

そんで今俺はなぜか……烈の虐めを受けています。
どんな状況かって？

逆吊りにされて、眼前に炎がメラメラと燃えているんですよ。
もう腹筋や背筋が筋肉痛が決定するくらい酷使してます。はい。

「もう無理…なんですけど」
「喋れるんならまだ大丈夫だな、はいガンバ！」

と鞭で背中を叩く烈さん、もう女王様だわ。

「痛い、痛いって！」
「なんで、秋人は、合格、してんのに、私だけ、まだ、合格してないんだよ！」

と不満をあらわに鞭を打ち続けている。
しかも、
「なんで中庭でやってんだよ～！」
さっきから周囲の視線が痛い、もう恥ずかしくて死んでしまいそうだよ。
しかも俺上半身裸だぜ？
それで炎で炙られて、仕舞いには鞭打ちの刑ですよ、冗談で済まされないんだよね。
これ、訴えたら俺勝訴できるよね？
訴えようかな～　でも訴えたら烈の家族敵に回す事になるんだよな……やっぱ止めとくか。
「ふぅ、ストレスも発散できたし。もう許してあげるわよ」
パチンッ。
と指パッチンをすると、炎は消えて縛っていた縄が解けた。
「ありがとう…とは言わないぞ？」
「別にいいわよ。傍から見れば完全に私が悪役だもの」
「？　えらく今日は素直だな」
「なに？　秋人は”こういう私”は嫌い？」
あー　今日は”こういう”気分なんですね、分かりました。
「いや、俺は優しいお前が好きだよ」
「そう、じゃあ私はそろそろ時間だから行くわ」
「あぁ、がんばれよ」

そう言って俺は烈を見送った。

２６　男なら正々堂々と。　（前）　（前書き）

今話は烈視点です。

26　男なら正々堂々と。　（前）

まったく、なんで秋人の方が私より早く…あ～　もう！
なんて私は腸が煮えかえりながら三回戦の会場に向かっていた。
会場は森林エリアの第三ブロック、木々が生い茂っている。

「遅せぇーんだよ、女ぁ！」
「うるさいな～　まだ五分前だろが、あんま五月蠅かったら灰にするわよ？」

手に炎を灯して脅してみるけど、ふぅん。と鼻で笑われてしまった。
なかなか楽しませてくれそうじゃない。

「私はもう準備できてるけど、どうする？」
「おいおい、男から殴りかかれってか？」
「それはレディーファーストって意味？」
「もちろん。俺は紳士だからな」
「笑わせないでよ！」

炎弾！

しかし男はヒラリと半身で炎弾丸を避ける。
それでも私はすかさず炎弾を追加、追加、追加、してるのに男はダンスでも踊るが如き動きで避けている。

「デカイ口叩いといてこの程度か～」
「なにお～！」
「今度は俺の番だな」

そう言って地面を一蹴りすると、秋人の様に一瞬で目の前まで来た！

「くっ」

「歯ぁ～　喰いしばれよぉ！」

ドンッ！

鉄球でも直撃したかと思うほど重い一撃が腹に入った。

「グハッ！」

吐血。

臓器でもやられたのか、口から血が溢れだしてくる。

気のせいか意識まで…薄れて……来たような。

「もう終わりかよ」

その言葉で私は意識を繋ぎとめる！

ムカついたから！

「…るなよ、なめるなよぉ！」

炎を灯した拳を男の顔面目掛けて振りかぶった。

だけど、私の拳は空を切った。

「お～っと　危っねぇ～」

三メートル離れたところで額の汗を拭ってやがる。

なんて速さだよ。

「スゥー　はぁー」

私は深呼吸をしてリラックスする。
こう言う時は冷静になれって秋人に言われたからな、案外アイツの言う事は当たるし、何よりも強いからな、だからアイツの言葉は聞き逃さないし、アイツの真似だってするさ。

私は近くにある木の枝を折る、それなりに太いヤツを。

「剣のつもりか？」
「いや、刀さ」
「どちらもそんなに変わんないだろうに」
「意味が変わる」
「そうかよ」

男はボクサーの様に拳で勝負してきた。
こいつは肉体強化系か、なんて結論に至りながら拳を木の枝で流す。
でもニ、三発目であっさりと折れた。
私の取る行動は一つ、口から火を吐いて男をけん制して私は大きく後ろに引き、

「炎帝…召弾！」

私の中で最高クラスの技を繰り出す事だ。

「なぁ！」

ボウッ！

と炎に呑み込まれた。

「死なない程度に加減してあげたから感謝しなさい！」

私は胸を張って言う、勝ったのだから勝者として当然の事だ。

ブスッ！

その音が聞こえると私は腹部に違和感を覚える。
なんで熱いんだろう？
そんな思いを抱きながら私は自分のお腹を見て驚いた。
自分の腹の光景を見て私の顔は強張る。

「まだ…しぶとい……わね」

木刀とあまり大きさが変わらない枝が刺さっていたのだ。
私はあまりの激痛に膝をつき、腹部辺りを探りながら声を殺す。

「ビビったぜぇ～　肉体強化だけじゃ間違いなく負けてたよ」
「……まさか」
「そう、俺は二重覚醒者（レアケース）なんだよ」
「まだ残って…たの」
「まぁな、戦いを楽しむために今までは肉体強化だけしか使わなかったんだ」
「……」
「さて、第二ラウンド。行けるか？」

私は無言で笑いかえす。
「もちろん！」という意味を込めて。

27　男なら正々堂々と。　（後）

傷口を炎で焼いて塞ぎ、烈は立ち上がって二重覚醒者（レアケース）を睨む。

「第二ラウンド、開始と行きましょう！」

「へぇ～　噂には聞いてたけど、ホント女には思えねぇーな」

「ふん、噂なんて尾が付くのは当り前よ」

烈は二重覚醒者目掛けて炎弾を飛ばすが、二重覚醒者は右手を前へ伸ばすと、炎弾は四方へ弾け飛んだ。

「効かないな～　こんな火の粉」

「そう、じゃあコレはどうかしら！？」

炎帝召弾！

「これはまともに受けたらヤバイな」

二重覚醒者が浮いたと思ったら、烈の真後ろに怪しい笑みを浮かべて立っていた。

「！　いつの間に」

「ぶっ飛ばされながら考えな！」

バッ！

と空気が振動し、烈は十メートルほど飛んだ所で木に激突して静止した。

烈の意識は今にも途切れそうだった。

（私が…負ける……のか？）

そう心で思っていると、二重覚醒者がふと目の前に現れた。

「なかなか期待の持てる器だったよ」

（クソ）

そこで烈の意識は途絶えた。

「さて、俺は開催本部に行くか」

『岩裂』と書かれたネームバッジを見ながらそう言葉を零した。

少し時が流れて烈は目を覚ました。

「もう夕方か」

ふと腹に視線をやると、焼いて塞いだ後が綺麗に無くなっていた。

「保険医ってこんな事も出来るのか、凄いな～」

よいしょ。と立ち上がり、校舎を目指して歩き始める。

退学か～　ちぇっ、せっかく楽しい学生生活を送れると思ったのにな～

秋人とも別れるんだよな、はぁ～

烈がネガティブな思考を働かせていると、目の前にツナギ姿にバケツに園芸用品を詰めたおじいさんが立っていた。

「君は合格じゃよ」

と笑みを浮かべて驚愕の事を言ってのけた。

「えっ、私が合格？」

「そうじゃよ、十分才能あると判断できるからの～」

「で、でも私は負けたんですけど」

「勝ち負けは関係ないんじゃ、儂らが見定めるのは本質じゃからの～」

「でも、おじいさんは教師…じゃないですよね？」

「そうじゃの～」

バケツを地面に置いておじいさんは地面に座る。

「しがない花壇のおじいさんじゃよ、でも教員免許はもっとるからの～」

「あぁ、それで」

烈は納得した。

入学式でおじいさんの顔を見たことが無かった。

だから今の言葉で、嘘だ。という考えを一応捨てた。

「そうそう、若者は笑顔が一番じゃ。行きなされ」

「お、おう」

何故か男勝りに答える烈、内心自分でも笑いながら校舎へ向かい始

めたのであった。

28　テストが終わると鬱憤を晴らしたくなる。

烈が花壇のおじいさんと別れてから一時間後、秋人は烈に同行という名の脅迫をされて駅前のファミレスでパフェを奢らされていた。

ファミレスの一角に近寄りがたい雰囲気を放つ秋人と烈。
秋人は財布の中身を確認しながら涙を流す、「二千円も」と呟きながら落ち込んで、烈はパフェを食べながら二重覚醒者（レアケース）の事を考え落ち込んでいた。
そんな二人から流れ出るオーラーは『負』だった。
店員でさえできれば近寄りたくない、なんて思うほどに暗かった。

「暗いな、何か嫌なことでもあったのか？」

そんな雰囲気の中、言葉を放ったのは秋人であった。

「うるさいわね、関係ないでしょ」

もちろん落ち込んでいる烈の反応は誰にでも予想できる物が返ってきた。
しかし、次に放たれた秋人の言葉で烈の顔は驚きに変わる。

「……二重覚醒者（レアケース）に負けたからか？」
「！　なんで知ってんのよ」
「そりゃー　アイツは校内で有名人だし、　お前に勝てそうなのはアイツくらいだしな」
「私はなんで負けたの知ってんのかを聞いてんの！」
「花壇のおじいさんって人に教えてもらった」
「……あのクソジジ～！」

烈の握っていたパフェ用のスプーンは烈の握力により原形を失った。
「あー　めちゃくちゃ怒ってるな」
怒り心頭。って言葉が一番に頭に浮かぶ秋人であった。
この後、店長が泣く泣くお願いして烈と秋人に店から撤退したとかなんとか。

所変わって今いるのは秋人の自室だ。
「それにしても相変わらず質素な部屋ね」
「質素じゃない、シンプルって言ってほしいな」
秋人の部屋は白と黒の二色のみの彩なのだ。
壁紙は白、床は黒のカーペットに黒い机にイス、ベッドも黒一色で、時計は白のデジタル時計、止めはカーテンだ。
右側は黒、左側は白と、奇抜としかいえない部屋模様。
ここまで黒と白にこだわるか？　なんて思ってしまうこだわりようだ。

「でも、気持ち悪いって言い方もあると私は思うけど」
「まぁ確かに、初めて入った人はみんな驚いた顔してたな。でも気持ち悪いはひどくないか！？」
「いやだって、ここまで黒と白にこだわらなくても」
「いいじゃん、黒と白。１と０みたいで」
「私にはよく分かんないわ」

ため息交じりに烈はそう言ってベッドに座り、秋人はイスに腰掛ける。

「にしても、テストはほんと大変だった」
「私のほうが大変だったわよ。あれは化け物以外の何でもないわ」
「それ言い過ぎ、可哀そうだろ」
「戦ってないからそんなこと言えんのよ、同じ一年とは思えなかったんだから！」

それ言ったらお前も同じだよ。と秋人は心中でそう思うのであった。

「まぁまぁ、何はともあれ無事にテスト受かったんだから良いじゃないか、終わりよければ全てよしだよ」
「……まぁそうね」

少々不機嫌なのは仕方がないか、と諦めながら秋人は缶ジュースを飲む。
ちなみに秋人の部屋には常時缶ジュース1箱置かれているのだ。
本人曰く、糖分と炭酸は何においても優先摂取すべし。なんだそうだ。

「それにしても、前来た時はファ〇タオレンジだったのに、もう全部飲んだの？」
「まぁ、そうだな」
「本当にジュース好きね」
「コーヒーも好きだ」
「はいはい」

烈は悪戯な笑みを浮かべながらコーラーを飲む。
結局、この後も烈の愚痴を聞く羽目になり、お開きとなったのは日

も沈みきった八時過ぎだったそうな。

28　テストが終わると鬱憤を晴らしたくなる。（後書き）

日にちの感覚が狂った作者です。
そういえば今日って1月6日ですね、すいません。
あと、少し文法？を変えてみました。

試験編……終了。

閑話　一難去ってまた一難

『宝くじ』

ある日の帰り道、秋人と烈は話し込んでいた。

「ねぇ、宝くじってさ。どれくらいの確率で当たるんだろうね？」

「さぁ、でも一等は人類誕生の確率と一緒。とかって聞いたことあるけど」

「それって、一等を連続して当てる確率。じゃなかったけ？」

そう言って烈は足を止める。

秋人は二、三歩遅れて立ち止った烈を見る。

「どうした？」

「宝くじを買おう」

烈の視線の先を見ると宝くじの販売店があった。

「小遣い使い切ったんじゃなかったのか？」

「だ・か・ら　ねぇ秋人、お願♪」

デレた。

秋人の思考はそう結論付けて打開策を模索するが、

デレ＋ウルウル上目遣い攻撃をモロに受けて秋人の防壁は音を立てて崩壊した。

この時、烈の口元が笑っていたのは言うまでもないだろう。

そして秋人は烈に宝くじを買わされた後思い出した。
今財布に入っていたお金は今夜の夕飯と朝食の食材調達用の資金であった事を。

『酒乱』

ある日、烈が秋人の家に遊びに来ていた。

「にしても、ホント秋人家はジュース飲み放題ね」
「そんな事はない、一日二本までと決めているし、糖分の接種はジュース以外は極力避けているんだぞ？」
「ジュース飲むのやめたら？」
「……炭酸は人類の宝だ！」

涙目になって必死の抗議をする秋人に烈は母性本能をくすぐられたとか。

「まぁ私も炭酸は好きだけど」

烈はベッドの脇に置いてあったケースから缶を一本取り出して一口。

ヒック。

しゃっくりのような音が秋人の自室に響いた。

「どうした？」
「秋人、らい好き～」
そう声を上げて秋人に飛びかかる烈、この時秋人の脳内は混乱を極めていた。
頭上には？マークがいくつも浮かび、思考は停止寸前まで追い込まれたが、鼻にツーンと来る臭いで全ての疑問が吹き飛んだ。
「酒！？」
（あのクソ親父、嫌がらせで送ったウイルスの仕返しか！）
「なんれ、アキは私にツンツンすんの～　れつはあきだ～い好きらのに」
「あー　はいはい。とりあえず離れろ、酒臭い」
「う、うわーん　あきはきらいなんら～」
大声を上げて裂き叫ぶ烈はまだ酒の残る缶をそこらに放り投げて、酒缶がまだ大量に入っている箱に手を伸ばし、かたぱしから開けては放り投げてをくりかえし、秋人の部屋は酒まみれになった。
「あ～　誰が掃除するんだよ」
呆れた秋人が雑巾でも取りに行こうかと、ドアノブに手をかけた時。
「死んれやるぅぅぅ～」
という烈の声が耳に入ったので、振り返るとどこから出したのかライターを持っていた。
「待て待て待てぇぇ！　ここでそれ使っちゃダメェェェ！　火気厳

禁だぞ今この部屋は！」
「やら～　あきが手に入らないんらったら……いっしょにしの？
ひとつになれるから」
えへへ、と笑う烈。
（ヤンデレ！？）
秋人の思考は最早は諦めムードが漂うが、必殺の一言を思い出す。
「烈！　お姉さんが迎えに来てるぞ！！」
その瞬間、烈は固まった。
ものの見事に、それはもう時間が止まってしまったんではないかと思わせるくらい。
「ふぅ～　上手いぐわいにトラウマを思い出したか」
ホッと安堵のため息を漏らすが、それもつかの間だった。
烈の手からライターが滑り落ち、床との接触の際に火花が散った。
あっ、ヤバイ。
燃え上がったものの、天井に設置されていた器具がすぐさま火を感知して、物凄い量の水が放出されて無事鎮火した。
だが、水浸しになった部屋と焦げた壁紙の張り替え諸々で秋人は当面の仕送り額を減らされ、ジュースを買い控える羽目になった。
しかも、水が勢い出たせいで酔った烈がパニックに陥り、秋人は暴れ狂う烈に襲われて全治二週間の怪我、それらの出来事で多大なる精神ダメージを負ってしまった。

２９　トラブルは意図あって起こるものだと思う。（前書き）

今度は理事会と戦っちゃいます。
ＶＳ理事会編　プロローグ？的な話。

29　トラブルは意図あって起こるものだと思う。

波乱のテストを終えて早一週間、クラスは大きく編成された。
A～Jまでクラスがあったが、退学者が続出した為に例年に比べて激減したのだ。
今現在、御南茂学園の一年はA～Eまでの5クラスだけ、これでも十分に多いと思えるのだが、昨年のテスト終わりの時点でクラスはA～Hまであったのだから、『激減』というのも頷ける。
教師陣は『今年は不作ですかな～』とか『まだ希望はありますよ』とかなんとか愚痴っていたそうな。

「にしても、短い付き合いだったな。F組」
「そうね、まぁでもFからEに変わっても違和感無いけど」
「それもそうだな。でもなんでF組の担任だった荻久保先生までE組に来てんですか？」

と秋人は教壇に立つ荻久保に問う。

「あ～　それはだね～　成り行き？」
「なんで疑問形なんですか、答えになってないですよ」
「ま～　気にするなって事で。え～　それでは自己紹介も面倒なんで……自習～」

相変わらずの態度に元F組一同は溜息を吐く。
そして元F組以外の人は、この先大丈夫だろうか。と机と睨めっこしていた。

「自習って言ってもな、テスト終わったばっかだし。何したらいいんだ？」

「私に聞かないでよ」
「そうだな、でも――――」

ピンポンパンポーン！

「一年E組、北条　秋人、岩裂　烈は風紀委員会第一会議室へ急行してください」

ピンポンパンポーン。

……。　流れる沈黙。

「行きますか」
「そうだな」

秋人と烈はつかの間の平穏を脱ぎ捨てて、戦場に赴くような面立ちで教室を後にした。

２９　トラブルは意図あって起こるものだと思う。（後書き）

次話、ＶＳ理事会編　第一話。
風紀委員＆生徒会が理事会に喧嘩を売ります。（予定）

30　権力がなんだ！　格差がなんだ！　人間怒ると恐いぞ！

―風紀委員会　第一会議室―

室内は重苦しい雰囲気が漂っていた。
この雰囲気の原因が法廷の様な部屋作りにあるのか、
はたまた生徒会と風紀委員会が検察と弁護士のように向かい合って座っているためのなのか、
それとも、裁判長が座る席になぜか秋人が座っているせいなのか、
秋人は迷っていた。
極限の緊張下の中で。

「えーと、先輩なんで自分はここに座っているのでしょうか？」
「さっきも言っただろう、この中で一番客観的に物事を見れるのはお前だから―――」
「だから、進行役を。という話でしたよね？」
「なんだ。分かっているなら聞くな」

少し機嫌を損ねてしまったが秋人には聞く必要があった。
いや、別にこの状況の話題じゃなくてもよかったんだ。
少しでも他の事に意識を傾けたかっただけなのだから、まぁ所謂『現実逃避』というやつだ。

今までの経緯を簡潔に説明すると、

1，呼ばれて会議室に来てみると、生徒会と風紀委員会が一触即発の状況だった。

2，そんな中で平然と烈が「だったらこんなで一番客観的に見れる奴が進行役すれば」の発言で尚早揉めたが秋人が抜擢された。

ちなみに詳しい話はまだ聞いておらず、どう進行役を務めたらいいのか戸惑う秋人が今いた。

「だから生徒会に任せてくれればいいんです！」

「そういう訳には……いかない」

バチバチバチ！

と火花が散る会長と委員長、両陣は息を呑んで行末を見守ろうとするが「だったら」と秋人の一言で、

全員の視線が秋人に集まる。

オホン。

とワザと咳払いをして先の雰囲気を一蹴りし、

「生徒会と風紀委員会が協力すればいいじゃないでしょうか？」

と言葉を続けた。

……その手があったか！

全員がそんな顔をした。

（いや、気がつかなかったの！？）

秋人もまた違う意味で驚いていた。

時間は過ぎ、室内から生徒会一行は引き上げた。
なんでも詳しい事はまた後日という事で、一方的に帰っていった。

「先輩、いったい何があったんでしょうか？」
「そうですよ～　私たち状況がイマイチ理解できないんですけど」

秋人と烈は稜姫に駆け寄り、事の詳細を問う。
稜姫はすっかり忘れていた。そんな表情を一瞬だが露わにした。

「あぁ……理事会がな」
「理事会が何か言ってきたんですか？」
「まぁな」
「どんな無理難題を押し付けられたんです？」

稜姫は烈の質問に表情を曇らせ、溜息を一回吐いてから言葉を紡ぐ。

「全部活動及び委員会の予算四割削減」

秋人と烈の表情は疑問から驚愕の表情に一瞬で塗り替えられる。
生徒会と風紀委員会が揉めていた大方の理由が分かったのだ。

これだ。
全部活動及び委員会の予算四割削減。こんな馬鹿げた話はない。
ただでさえ部も委員会も予算が足らず会計は火の車状態を如何に鎮静させるかで頭を悩ませる程の財政状況なのに、こ　の上で予算が四割も削減されたら溜まったもんじゃない。
とくに風紀委員会は一番予算を多く貰っているが、足りてないのが現状。
文句を言うのは当然だ。

しかも、稜姫先輩の話によると、二・三年生は職員室を襲ったというから驚きだ。
さすがにその中に委員会に属する人はいなかったが、鎮圧のために相当苦労したらしい。

そして生徒会、きっと苦情や陳情の数が半端ないだろう。
書類地獄……考えただけでも頭が痛い、生徒会も必死に解決しようというのは分かる。

で、どちらか解決するかでもめていたという訳なんだそうだ。
どちらも頭に血が上りすぎていたんだな、ストレスとかストレスとかストレスで。

「にしても、理事会だったらこうなる事くらい予想できますよね？」
「そうなんだ。だから余計にイライラするんだろう」
「そうですよね～　なんだか小馬鹿にされている気分ですもんね～」

そこには黒いオーラを身にまとった女王様が降臨していた。
そして、目が笑っていない烈を見たのはいつぶりかな～　と秋人はまた現実逃避をした。

３０　権力がなんだ！　格差がなんだ！　人間怒ると恐いぞ！（後書き）

―予告―

ＶＳ理事会編　第二話

何だかんだで生徒会と風紀委員会は手を取り合ったのだが……

31　『昨日の敵は今日の友』　考えた人は苦労人だと思う。

―翌日―

生徒会室に秋人、烈、委員長、稜姫、生徒会メンバーが集結していた。

「で、お兄ちゃん。共闘って事で間違いないね？」

コク。

と会長の問いに委員長は無言で頷く。

「じゃあ手順を改めて確認という事で宜しいでしょうか？」

「うん、楓ちゃん」

「既に生徒会として反対の立場を理事会には伝えてありますので、あとは武力に頼るしかありません、ですので本日各校舎の職員室を制圧後、理事会に再度取り下げを要求するのが最も良い案かと」

楓の提案に皆驚いた表情を浮かべている。

「か、楓ちゃんってそんな好戦的だっけ？」

会長に至っては宇宙人でも見るかのような目で楓を見ている。

「会長、陳情や嘆願書の処理に一番困るのは書記である私です」

ずれたメガネを直しながら冷静な口調で言うが、額には青筋が浮か

んでいた。
どれほどストレスが溜まっているのか容易に窺うことができる。

「よ、よし！　みんなでガンバロ～！」

それからの動きは各人早かった。
教職員達もまさか『犬猿の仲』、『水と油』と言われていた生徒会と風紀委員会が手を組んだとは露知らず。
容易に各校舎の職員室を制圧し、教職員達も拘束できた。
そして一時間目の開始を告げるチャイムの代わりに生徒会からのお知らせが流された。

「え～　会長の飯塚（いいづか）　朱音（あかね）です。本日は全員自習をするように、理由は予算に関する事と言えば分かると思います、いいですね～」

という物が流された後、歓喜の声が校舎中から上がったのは言うまでもない。

それと同時に理事会から生徒会長と風紀委員長に対して、臨時理事会に出席するように要請があったが、会長が「話したければ貴方達が来なさい！」と断り、大人の事情ＶＳ子供の反乱の構図が完成した。

それまでは万事順調だった、しかし理事会から「では、そちらの代表一人と話したい」という申し入れで兄妹喧嘩が勃発してしまったのだ。
きっと理事会もこれを見込んで言ったんだろ。と秋人も検討はついている。

”も”というのはこの場にいる全員という意味だ。

「だから、生徒の代表たる私が行くと言っているでしょ！」

「朱音は…妹…兄の俺が行く」

「兄弟の関係は今どうでもいいの！　生徒の代表たる私が文句を言いに行くの！」

「風紀を守るのが仕事…だから俺が行く」

なんて押し問答がもうかれこれ三十分、一向に解決が見えない。

だが、転機という物は突然やってくるものだった。

「あのー　平等って事でくじで決めません？」

また烈が提案した。

こういう時に限って何故かいつも被害をこうむるのは秋人、それを散々経験している秋人は猛反発。

「くじなんて運まかせな物で生徒の行末を決めるなんて、無責任すぎると思います！」

「だったら良い案あんの？」

「……」

沈黙。

それは無いという事を肯定しているも同じ行為だった。

「じゃあ作りますね～」

▲▲▲

が、状況が状況なだけに秋人は自分の権利を委員長に譲り渡した。

「じゃあ行ってくる」

「い、行ってらっしゃい」

秋人はぎこちない笑みで委員長を見送る。

その理由は後ろで「死ねばいいのに～」と言わんばかりの死線を送る会長のせいだ。

31　『昨日の敵は今日の友』　考えた人は苦労人だと思う。（後書き）

―予告―

ＶＳ理事会編　第三話

理事会から帰ってきた委員長の口から告げられた事実は…

…

32　お金の管理は大事だよね。

委員長が臨時理事会に出頭して二時間が経とうとしていた時、委員長が帰ってきた。

そして委員長が言うには、予算カットの理由は学校経営が先のリー○ンショックで資金に大ダメージを受けた為。というもので、「思いっきり大人の事情だな」というのが全員の意見だった。

「これって、どうすればいいんですかね？」

秋人は問う。

「私たちの立場って……我儘な子供だね～」

烈は愉快そうに笑う。

「ここは生徒の代表に任せるのがいいかと思いますが」

稜姫は委員長に責任転嫁を進め。

「会長……頼んだ」

委員長は妹に全て押し付ける。

「あんまりだよ～！」

「そうです。生徒会に押し付けないでください！　苦労するのは私なんですから！」

「でも、会長が生徒に宣言しちゃったしね。職員室の鎮圧」

秋人の言葉に室内の温度が五度下がる。

「なに？　私が悪いの？　全部私のせいなの？　違うもん！」

会長は駄々をこねる子供のように涙目になりながらジタバタする。
まぁ会長に非はないのだが、傍から見れば会長は被害者に映る事は間違いないだろう。

「会長落ち着いてください、可愛いんですけど、落ち着いてください、可愛いですけど」

楓の説得もあって会長は徐々に落ち着き始め、

「バカ～！」

と声を上げつつ委員長（兄）へ渾身のビンタ。

「痛そうだな」
「そうね」

委員長は壁へめり込み、稜姫が必死に救助を試みていた。

「で、結局どうするんですか会長」
「理事会の私財でどうにかしてもらおうと思います」
「でも受け入れるとは思わないんでけどね、私だったら断りますし」
「なんの為の『能力』かな？」

会長の笑顔に背筋に冷や汗が流れるが、「学園内じゃないと意味ないですよね？」と秋人が能力行使の大前提を述べる。

「この学園には理事会メンバーの孫とかが通ってるんだよ？　使わない手はないよね～♪」

可愛い顔して何言ってんだか。秋人の心中に嵐がやってきた。

３２　お金の管理は大事だよね。（後書き）

―予告―

ＶＳ理事会編　第四話

遂に理事会メンバーが御南茂学園の敷地に入り、
大人と子供は対峙する……

33　目には目を　歯には歯を　だったら悪意には悪意を。

生徒会長による『家族ってやぱり大切だよね作戦』で理事達の息子、娘、孫らを人質に取って学園に来るように要求して一時間が経った頃だった。
校門で待っていた会長と委員長と秋人、烈、稜姫は理事らを出迎えた。

胸元まで伸びる白い顎鬚が特徴の老人が一歩前へ出る。

「やれやれ、やってくれるのぉ」
「桑井（くわい）理事、やってくれたのは理事会の方でしょ。予算削減なんて認めないもん」
「これは子供の出る話ではな無いのだがね」
「でも……生徒には権利がある」
「それにあんた等がしっかり資金をやり繰りしてクレてりゃ問題なかったんだよ」
「烈、それ少し言いすぎじゃないか？」
「秋人、それくらい言ってやらねば気付かんよ」

各々言いたい放題言っている。
まぁさすがに長生きしてるだけあって怒っている様子はないが、呆れた顔で桑井理事の後ろから五十代ほど男性が前に出てきた。

「君らには関係のない話なんだ。養われている身分なのだから『こういう問題』には口を出すな」
「重井（しげい）理事か、貴方こそその養われている身分の者のお陰で今の地位がある事を忘れないで欲しいものだ」
「『切り裂き姫』、言ってくれるじゃないか。能力を使えるのは私

も同じなんだがね」
「ふん、貴様を今すぐにでも断罪してやろうか、老害！」
ヒートアップしてきたので、稜姫は委員長に、重井は桑井になだめられ、口撃は沈下した。
「さて、話し合いでは解決できないと儂は思うが……生徒会長はどう思うかね？」
「同意見で～す」
「できれば戦いたくないんじゃがな、老体には堪えるんじゃよ」
「じゃあ、理事会が折れてくれれば済むね♪」
「それは無理じゃよ、だから」
「「戦争をしよう」」
瞬間、空間が悲鳴を上げる。
この場にいる一人一人の覇気に当てられて、世界に矛盾が生まれようとしている。
「う、キツイ」
「そう、ね」
秋人と烈は地面に四つん這いになる。
「気を失わないだけでも凄い事だぞ？」
と稜姫が片膝を突きながら両名に声をかける。
「さて、おじいさん・おばあさんに手を上げるのはどうかと思うけ

ど」
「やらせてもらう……ッ！」
生徒会長は紅いオーラの様なものが身体から発せられ、
委員長は蒼色のオーラの様なものが身体から発せられる。
「ほぉう、これが『精霊』の力か。興味深い。しかし、『悪魔』を侮るでないぞ？」
今度は理事たちが黒いオーラを発し、肌が真っ黒に染まり、目が赤く光っている。
「これ、何てファンタジー何ですか？」
「知らん、私が聞きたいくらいだ」
烈は目を輝かせて見入っている、四つん這いだが。
まぁ確かにこの光景は忘れたくても忘れられない光景で、
恐怖も感じれば、憧れという感情も抱くだろう。
事実、秋人も恐怖し、憧れもしている。
ドクン。
秋人の心臓は鼓動を高める。
ドクン、ドクン、ドクン、ドクン！
『あの程度の力に憧れるのか？　俺』

！　久しぶりに出てきたな

『あぁ、俺gたオレを求めたんでな』

？　誰も求めてないぞ？

『おいおい、酷い事言ってくれるな。今お前は力を望んだろ？』

まぁ確かにそうだけど。

『それがオレだ。力＝オレ、願望＝オレだ』

なんだそれ、無茶苦茶だな。

『それがオレという存在だ。で、どうだ？　力を望むか？』

……俺は――――

３３　目には目を　歯には歯を　だったら悪意には悪意を。（後書き）

―予告―

ＶＳ理事会編　第五話

秋人がオレに望む物とは？　『精霊』『悪魔』の意味は？

３４　人生の先輩には敬意を。

『それがオレという存在だ。で、どうだ？　力を望むか？』

……俺は――――

俺は人を守る力が欲しい。

『そうか、だが守るという事は壊すという事と同義なのは理解しているな？』

勿論。

『そうか、今回は力だけを貸してやるよ。面白そうだからな』

時間はどれくらいだ？

『そうだな、せいぜい三十秒くらいだろう』

前よりか短いな。

『今回オレがサポートしないからな、仕方ない。健闘を祈るよ…俺』

あぁ見てやがれ、俺がやればできる子ってトコを見せてやるよ。オレ

瞬間、身体の奥底から暖かい何かが湧き上がってくるのを秋人は時間する、

またそれと同時に体内に刺すような痛みが現れ始めた。

「秋、人？」

烈は目を疑う、秋人の瞳の色が金色に変化している事に、秋人が放つ神秘的威圧に。
なによりも一番驚いた事は、堂々と二本脚を地につけて立っていた事だ。

「理事共！　俺が相手になってやる！」

あれー！　なんか口調が変わってるんですけど！

『神格化の影響ってとこだな、所謂”ハイ”ってやつだ』

オレの言う事に少し不満を感じながらも秋人は五月雨を抜刀、地面を力ずよく蹴って理事目がけて駆ける。
一瞬にして桑井理事の目の前に移動した秋人は峰で老体に鞭を打つかの如く叩きつける。

『お～　俺は鬼畜だね～　老人を甚振るなんて』

変な言い方するな、本当に俺が鬼畜みたいじゃないか！

『違うのかい？　誰がどう見ても老人に押しかかる若者だぜ』

……もういい。

「桑井理事！」
「お前も邪魔だ」
「な、ぐっ！」

直後、理事の一人が校門の方へ吹き飛ぶ。
委員長や会長、稜姫や烈、理事一同はただ見る事しかできなかった。
「いやはや、これが北条　秋人。『神の器』の力か」
「！　理事長」
桑井理事の視線の先には……
「花壇の、おじいさん？」
「フォッフォッフォ、久しいのぉ～」
―『時間切れだ俺』―
「それにしても、『精霊化』『悪魔化』しても神には敵わんということかの。いやはや興味深い事この上ないのぉ」
「理事長、来るんなら前もって連絡してよ」
「おやおや、生徒会長に一々言わねばいかんのか？　儂が作った学園なのに」
「そうよ！　全然仕事してないじゃん！　全部生徒会（私たち）に押し付けて、老後の生活をエンジョイしてんだから！」
「老体に書類仕事は堪えるんじゃよ」
「花や木々の世話の方が何倍も疲れる！　肉体労働じゃん！」
「落ち着け……みっともない」
「お兄ちゃんは黙ってって！」
「まったく、実の祖父に向かって言うセリフかのぉ～　孫に嫌われるのいやじゃわ」
なんていう漫才？　というのが秋人と烈が思った第一印象だった。

「花壇のおじいさんは、理事長？」
「ピンポ～ン」
「若々しいですね」
「君ほどじゃないわい、秋人君」
「それにしても、精霊だの悪魔だの神だの。御南茂学園はいつから宗教専門学校になったんですか？」
「実際にいるんじゃから、宗教とは関係ないわい」

「いるの？　精霊とか悪魔とか神とか」
「おるよ」
「いるね♪」
「……いる」
「存在はしているな」

理事長、会長、委員長、稜姫の言葉に秋人も烈も豆でっぽを食らった顔をしている。
その表情を見た委員長以外の人は悪戯な笑みを浮かべ、満足げに一息吐く。

「詳しく話しては、くれるんですか？」
「無理じゃの」
「無理☆」
「……」
「不可能だな」

期待ははずれの返答に少しがっかりするが、秋人はある事を思い出す。
　オレに聞いてみればいいじゃないか。と。

なぁ、教えてくれよ。

『やだね。その方が面白そうだから』

お前もSか！

『ドをつけ忘れるな』

認めたよコイツ。

「それよりも、理事長。あなた仕組みましたね？」

「はて、なんのことかのぉ～」

稜姫の質問に理事長はしらを切り、テクテクとこの場から去ろうと歩み始める。

３４　人生の先輩には敬意を。（後書き）

―予告―

ＶＳ理事会編　最終話

「実はのぉ～」　「それが御南茂学園の秘密」　「酷い？

何を言ってる。それが現実だ」

35　本当の意味での策士は一握りしかいない。

―理事長室―

「で、理事長。俺達を招いてくれた理由は？」

秋人は理事長に問う。

「実はのぉ～　そろそろこの学園の秘密を話そうかと思っての」

「秘密って、そんなモンがあんの？」

「烈君は口がちと悪いのぉ～」

「んな事は聞いてない」

烈はいつも以上に勝気な部分が出ていた。

「烈、少し慎め。それと理事長、そろそろ本題に」

「うむ、そうじゃの。それで秋人君、彼は元気そうじゃったか？」

「彼？」

秋人は頭上に？を浮かべる。

それを見ると、理事長は笑みを浮かべ、「君の中におる存在の事じゃよ」と少年の様な笑顔を浮かべる。

秋人はそれを聞くと、ハッ。とした表情をする。

「知ってたんですか？」

「知っておったよ。じゃから稜姫君は君を風紀委員会へ誘った」

秋人は理事長の言葉を聞いて稜姫へ視線を移す。

「知ってたんですか？」
「あぁ、言い訳になるかもしれないが……名前しか知らなかったんだ」
「そう、ですか」
それは最初であった時は”知らなかった”という事だ。
だから、秋人は責める気は起きなかった。
いや、それ以前に知っていたとしても秋人は稜姫を責める気は皆無だった。

「それでのぉ、実はこの世界には”天使”や”悪魔”や”精霊”
”神”と呼ばれる存在は実在するんじゃよ」
「えぇ、そういう風にさっき言ってましたけど」
「まだ疑っとるの、じゃが」
理事長は手のひらを返すと、光がポォ手のひらの上にと現れた。

「これは？」
「精霊じゃよ、ほれ」
光は秋人の周りをクルクル回り始めた。
そして時折、思わぬほうへ行ったり来たり、まるで意思があるように。

「それに、君も不可思議な経験をしてるじゃろ？」
「まぁ、確かに」
そう、考えれば”オレ”なんて存在は本来ありえない。
そもそも二重人格なる物でさえ、怪しい物なんだから。

「その不可思議なモノ達がこの学園の土地に宿っておる、居座っていると言ってもいいかの」
「それが御南茂学園の秘密？」
「いや、本当の秘密は。三年の卒業試験の内容じゃよ」
「内容？」
「そう、死人が必ず出る内容じゃからの」
「！？」
「そんな、学生の領分を越えてますよ！」
「酷い。と言いたいのかの？」

理事長は無表情、烈は少し思考が鈍っているように見える。

「当たり前だ！　アンタはそれでも教育者か！」
「フォッフォッフォッフォ。そうじゃよ」
「仕方のない事なんだ、そればかりは逃れようのない運命なんだよ」
「でも！」
「酷い？　何を言っている。現実を見ろ」

理事長は目を細め秋人を叱るように言葉を紡いだ。

「秋人、少し落ち着けよ」

烈は秋人の事を心配して肩に手を置き、秋人は少し自分が冷静さを取り戻せた事に気が付き「ありがとう」と烈に感謝の言葉を掛け、秋人は何かを決心した様な表情で一歩前出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7132i/

ファンタジーなんてクソ喰らえ！

2010年10月11日14時11分発行